ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書XVI-1

長沢・西火打遺跡，正恩寺遺跡

—坂田郡近江町所在—

国友遺跡，寺田遺跡

—長浜市所在—

1989．3

滋賀県教育委員会

財団法人滋賀県文化財保護協会

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書XVI-1

長沢・西火打遺跡，正恩寺遺跡

—坂田郡近江町所在—

国友遺跡，寺田遺跡

—長浜市所在—

1989．3

滋賀県教育委員会

財団法人滋賀県文化財保護協会

序

滋賀県教育委員会では、活力のある県民社会、生き甲斐のある生活を築くための一つとして、文化環境づくりに取りくんでいます。特に、文化財保護行政にたずさわるものとして、近年の社会変化に即応し県下の実情や将来あるべき姿を見定めつつ、文化財の保護と保存に努めております。

先人が残してくれた文化財は、現代を生きる我々のみならず子々孫々に至る貴重な宝でもあります。このような大切な文化遺産を破壊することなく、後世に引き継いでいくためには、広く県民の方々の文化財に対する深い御理解と御協力を得なければなりません。

ここに、昭和63年度に実施しました県営ほ場整備事業に係る発掘調査の結果を取りまとめましたので、御高覧のうえ今後の埋蔵文化財の御理解に役立てていただければ幸いです。

最後に、発掘調査の円滑な実施に御理解と御協力を頂きました地元の方々、並びに関係機関に対して厚く御礼申し上げます。

平成元年３月

滋賀県教育委員会
教育長 西池季節

例　　言

1．本書は、昭和63年度県営ほ場整備事業に伴う坂田郡近江町長沢遺跡・西火打遺跡、同町正恩寺遺跡、長浜市国友遺跡、同市寺田遺跡の発掘調査報告書で、昭和63年度に発掘調査し、整理したものである。

2．本調査は、県農林部からの依頼により、滋賀県教育委員会を調査主体とし、財団法人滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。

3．発掘調査にあたっては、近江町教育委員会、長浜市教育委員会の協力を得た。

4．本書で使用した方位は長沢遺跡、西火打遺跡、正恩寺遺跡、寺田遺跡は磁針方位に基き、国友遺跡は座標方位（新平面直角座標系VI）に基づいた。高さについては東京湾の平均海面を基準としている。

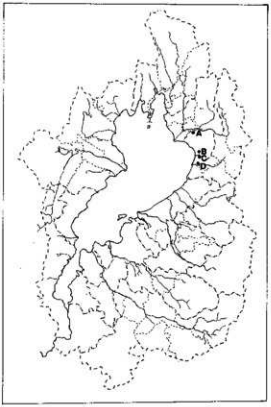
5．本事業の事務局は次のとおりである。

滋賀県教育委員会

文化財保護課長	堀出亀与嗣
〃　課長補佐	小川　啓雄
埋蔵文化財係長	林　博通
〃　主任技師	木戸　雅寿
管理係主任主事	山出　隆

財団法人滋賀県文化財保護協会

理事長	吉崎　貞一
事務局長	中島　良一
企画調査課長	近藤　滋
調査第一係長	大橋　信弥
〃　主任技師	葛野　泰樹
〃　技師	奈良　俊哉
〃　技師	小竹森直子
〃　技師	平井　美典
〃　技師	大崎　哲人
総務課長	山下　弘



本報告書所収遺跡位置図
A：国友遺跡　B：寺田遺跡
C：長沢・西火打遺跡　D：正恩寺・地蔵堂遺跡

6．本書の執筆は、第1章1・2と3の(1)・(2)を葛野泰樹、第1章3の(3)を小竹森直子、第2章1と3の(1)を奈良俊哉、第2章2と3の(2)を平井美典が行ない、編集は執筆者全員が行った。

7．出土遺物や写真・図面については滋賀県教育委員会で保管している。

目　　次

序　　文

例　　言

第１章　坂田郡近江町長沢遺跡・西火打遺跡，正恩寺遺跡

1．は じ め に …… 1

2．位 置 と 環 境 …… 2

3．調　　査 …… 3

(1) 長沢遺跡 …… 3
(2) 西火打遺跡 …… 4
(3) 正恩寺遺跡 …… 7

第２章　長浜市国友遺跡，寺田遺跡

1．は じ め に …… 16

2．位 置 と 環 境 …… 16

3．調　　査 …… 17

(1) 国友遺跡 …… 17
(2) 寺田遺跡 …… 32

図 版 目 次

長沢・西火打遺跡

図版 一 1. 調査地遠景（南から）
2. 調査風景

図版 二 1. Aトレンチ（北から）
2. Aトレンチ柱痕

図版 三 1. Aトレンチ柱穴
2. Bトレンチ（西から）

図版 四 1. 調査地遠景（東から）
2. トレンチ（東から）

図版 五 1. 西火打遺跡柱穴
2. 長沢遺跡出土遺物

正恩寺遺跡

図版 六 1. 調査前全景（西から）
2. T1遺構完掘状況（西から）

図版 七 1. T3−SK1全景（西から）
2. T3−SK1瓦類出土状況（北から）

図版 八 出土遺物・瓦類

図版 九 出土遺物・瓦類

図版 十 出土遺物・瓦類

国友遺跡

図版十一 1. 発掘調査前風景（東から）
2. 遺跡全景（南から）

図版十二 1. SK03遺物出土状況
2. SK03検出風景

図版十三 1. SK03検出状況
2. トレンチ西側遺構検出風景

図版十四 1. SH01検出風景（南から）
2. SH02・03検出風景（南から）

図版十五 1. SH04検出風景
2. 左：トレンチ東側遺構検出風景
右：SD06遺物出土状況

図版十六 SD06出土土器

図版十七 各遺構出土土器

寺田遺跡

図版十八 1. 第1トレンチ（西から）
2. 第1トレンチ（北から）

図版十九 1. 第2トレンチ（北から）
2. 第3トレンチ（南から）

図版二十 1. 第4トレンチ（南から）
2. 第4トレンチ（北から）

図版二十一 1. 第5トレンチ 調査前遠景（北西から）
2. 第5トレンチ、五輪塔・石仏検出状況

図版二十二 1. 第5トレンチ（南西から）
2. 第5トレンチ（北東から）

図版二十三 1. 第5トレンチ周辺石仏群
2. 出土遺物

図版二十四 1. 出土遺物
2. 出土遺物

挿 図 目 次

長沢・西火打遺跡

第１図　長沢遺跡・西火打遺跡・正思寺遺跡位置図

第２図　長沢遺跡・西火打遺跡地形測量図及びトレンチ配置図

第３図　長沢遺跡・西火打遺跡トレンチ平面図及び土層柱状図

正思寺遺跡

第４図　トレンチ配置図

第５図　Ｔ１・Ｔ３平面図・断面図

第６図　Ｔ１出土遺物実測図

第７図　Ｔ３出土瓦類実測図・拓影図(1)

第８図　Ｔ３出土瓦類実測図・拓影図(2)

国友遺跡

第９図　国友遺跡・寺田遺跡調査位置図

第10図　SD06出土遺物

第11図　トレンチ配置図

第12図　遺構平面図

第13図　SH01遺構詳細図

第14図　SH02・03・04遺構詳細図

第15図　SD06出土遺物

第16図　各遺構出土遺物

寺田遺跡

第17図　トレンチ配置図

第18図　Ｔ１遺構実測図，Ｔ１出土遺物実測図

第19図　Ｔ４・Ｔ５出土遺物実測図

第1章

長沢・西火打遺跡・正恩寺遺跡

第１章　坂田郡近江町長沢遺跡・西火灯遺跡、正恩寺遺跡

１．は　じ　め　に

本報告は、滋賀県が実施する昭和63年度県営ほ場整備事業天の川西部地区長沢工区（長沢遺跡・西火打遺跡）と、天の川西部南地区（正恩寺遺跡）に伴う発掘調査の成果である。

長沢遺跡と西火打遺跡は当該地に隣接する一般国道８号線（長浜バイパス）工事に伴い発掘調査が実施されており、長沢遺跡からは弥生時代の河川跡３条と弥生土器、木器、石器等の遺物が検出され、西火灯遺跡からは平安時代の条里畦畔やそれ以前の掘立柱建物、井戸等が検出されている。

今回の調査対象地は、長浜バイパス工事に伴う調査地区の西側にあたり、遺跡に影響をおよぼすとみられる排水路工事部分において事前に試掘調査を行い、遺構・遺物の確認された部分の発掘調査を実施した。

調査は、財団法人滋賀県文化財保護協会主任技師葛野泰樹、技師大﨑哲人を担当者として、昭和63年４月12日から同月15日まで現地調査を行った。なお、長沢遺跡・西火灯遺跡の試掘調査は、滋賀県教育委員会文化部文化財保護課主任技師木戸雅寿を担当者として、昭和62年12月25日に実

1　長沢遺跡　2　西火打遺跡　3　正恩寺遺跡　4　地蔵堂遺跡　5　奥松戸遺跡
6　法勝寺遺跡　7　狐塚遺跡　8　碇　遺跡　9　高溝遺跡　10　顔戸遺跡

第１図　長沢遺跡・西火打遺跡・正恩寺遺跡位置図

施した。

正恩寺遺跡は、昭和62年度に同ほ場整備事業に伴う発掘調査において排水路部分の調査が行われ、今年度はその東延長部分の工事が予定されていたため事前に発掘調査を実施した。前年度の調査では、白鳳期の瓦類や7世期後半から11世期後半の土器類と掘立柱建物の一部等が検出されている。

調査は、財団法人滋賀県文化財保護協会技師小竹森直子を担当者として、昭和63年4月12日から同月22日まで現地調査を行った。

2．位置と環境

長浜平野の南部に位置する近江町は、天野川によって形成された沖積平野に立地する。標高は87m～93mにあり、低湿地帯である。

当地は、北へは長浜、敦賀を経て日本海へ、東へは天野川にそって上れば関ヶ原を経て伊勢湾へ、西へは天野川河口付近に推定される朝妻港から大津を経て畿内へ、さらに南へは中仙道を通り陸路畿内へと通じ、まさに交通の要衝である。周辺の遺跡から出土する弥生土器をみると、畿内系のほか東海系、北陸系の土器が含まれ、弥生時代にあっても文化の交流点的様相を呈する。

天野川流域には縄文時代早期から連綿と中・近世にいたる遺跡が分布し、特に弥生時代から奈良時代にいたる遺跡の密度は注目にあたいする。

長浜バイパス工事に伴う鴨田・大辰己・長沢・奥松戸・法勝寺・狐塚等の各遺跡の調査からは、弥生時代中期以降の方形周溝墓や竪穴住居が確認されており、低湿地帯の中でわずかな微高地に人々が居住していたことを物語っている。これらの遺跡は土川をはさんでほぼ同標高に連続していとなまれ、本来は一つの集落としてとらえられ大集落を形成していたと言える。

狐塚・法勝寺遺跡では古墳時代の方形周溝墓も検出され、狐塚遺跡では各種の形象埴輪を有する帆立貝形古墳も検出されている。西方の横山丘陵から能登瀬には、山津照神社古墳、塚ノ越古墳、人塚山古墳等の後期古墳が点存する。狐塚古墳群は山津照神社古墳に先行する6世紀前半期の首長系譜の墳墓と考えられており、さらに6世紀中頃以降の山津照神社古墳以降の横穴式石室を早期に導入する首長墓の先行形態として、その造墓形態はプレ群集墳的様相を呈している。狐塚古墳群から人塚山古墳にいたる古墳の築造は、当地を本拠地とする息長氏の歴史的推移との関連性からも追求される問題であり、今後の研究課題である。

7世紀中頃になると古墳は築造されなくなり、各地に寺院が建立されるが、天野川流域においても法勝寺遺跡、正恩寺遺跡、三大寺廃寺等白鳳期以降の瓦を出土する遺跡が10箇所確認されている。

正恩寺遺跡から出土する山田寺式軒丸瓦は法勝寺遺跡と三大寺廃寺基壇跡から出土し、無顎式三重弧文軒平瓦は法勝寺遺跡と浅井寺廃寺遺跡から出土する。平瓦については、正恩寺遺跡と同一タタキが三大寺廃寺と法泉寺遺跡から出土する。これら瓦類におけるセット関係は、天野川流

域における遺跡（寺院）をはじめ湖北地方の諸遺跡と互いに密接な関係にあったことを物語っている。正恩寺遺跡についてみれば、まだ寺院としての構造は明らかにされていないが、法勝寺につづき白鳳期に創建された同系の寺院の可能性があり、法勝寺を頂点とする天野川流域の古代寺院の相関関係とその背後の解明は、長浜平野の社会構造を明らかにする資料となるものである。

西火灯遺跡から検出されている掘立柱建物や井戸は10世紀後半まで認められ、それらを切り込んで条里畦畔がある。また、奥松戸遺跡は平安時代中期頃までの集落で、建物の一部は西火灯遺跡と同時期の10世紀後半頃に水田畦畔によって破壊されている。このことは、当地域が10世紀後半に集落の再構成に伴い大規模な条里再開発が施行され水田化したとみられており、坂田郡条里の段階的な条里開発と解釈されている。

3．調　　査

(1)長沢遺跡

試掘調査は第26-1号支線排水路工事部分に11箇所（No.5～15）のグリッドを設定し、遺跡の範囲を追求した。

No.5・6は表土下約70cmにおいて遺物を包含する黒灰色砂層が確認され、No.7～15は緑青灰色系粘土層が水田耕土・床土の下に堆積するが、遺構は認められなかった。

発掘調査は、試掘調査で確認された総延長約150mにおいて実施した。トレンチの幅は約2mとし、調査対象面積は約300m²である。

基本的な土層の堆積は、上層から耕土、灰色粘土が約30cm、鉄分沈澱層が約10cm、白灰色粘土が約10cm堆積する。表土下約50cmからは暗灰色粘土、黒灰色粘土とつづき、表土から約70cm下層には黒ボク状の淡黒色粘土層が約10cm堆積し、流木が若干認められる。この淡黒色粘土層を切り込んで、ピット状遺構を2基検出した。その下層は黒灰色砂層が厚く堆積し、湧水が著しい。

ピット状遺構は平面楕円形を呈するものと、柱根状の木材をもつ平面円形を呈するものとがある。今回の調査では遺物は出土しなかったが、試掘調査で出土した遺物は最下層の黒灰色砂層からの出土である。なお、湧水の著しい黒灰色砂層は表土下約80cmの標高約86.3mから認められるが、トレンチ崩壊のおそれがあるため、それ以上の掘削はさけた。

今回の発掘調査でトレンチを設定した地区は、昭和47年度の長浜バイパス工事に伴う調査で検出された旧河道Ⅱの西延長上にあたり、黒灰色砂層は河道の埋土の可能性がある。昭和47年度の調査では、表土下約60cmで腐植土層を、約80cmで旧河道の埋土である中砂層を検出している。旧河道の幅は約10mあり、深さは約1mで3条確認され、埋土から木製鍬未製品や皿状木製品をはじめ、大型蛤刃石斧、石剣の石製品や弥生時代中期から後期の土器類が多量に出土している。河道内には杭列と焚火跡があり、魚貝類を捕獲するために設置されていた施設と推定されている。

現在、遺跡の南側に設備された土川が西流しているが、本来は当遺跡や西火打遺跡で検出されている河川跡のように、微高地を縦横無尽に流れていたと想像される。この河川のわずかな空間地に人々は居住していたのであろう。遺跡の立地する微高地は、これら河川のもたらした土砂の

堆積によって形成されたもので、時には氾濫等によって、人々に災害を及ぼしたとみられるが、反面河川を有意義に利用することにより、人々に恵みをもたらしていたともいえる。杭列はその証しであり、魚貝類を捕獲する施設の他に稲作農耕の用水確保のために設置されていた堰の可能性もある。

当地域には北から長沢遺跡、西火打遺跡、奥松戸遺跡、法勝寺遺跡、狐塚遺跡等が微高地に立地しており、一連の遺跡と考えられている。これらは、土川を軸として結束し、複数の小集落が結合した有機的な共同体を形成していたと考えられる。

(2)西火打遺跡

試掘調査は第26号小排水路工事部分に4箇所（№1～4）のグリッドを設定し、遺跡の範囲を追求した。

その結果、№1・2において表土下約60cmから柱穴とみられるピットを確認した。№3・4では青灰色砂礫層、黒紫灰色粘土層の堆積が認められたが、遺構・遺物は検出されなかった。このことから、№1・2のグリッドを設定した第26号小排水路の東側約50mには遺構が存在するとみられ、発掘調査が必要であることが判明した。

発掘調査は、試掘調査で確認された総延長約50mにおいて実施した。トレンチの幅は約2mとし、調査対象面積は約100㎡である。

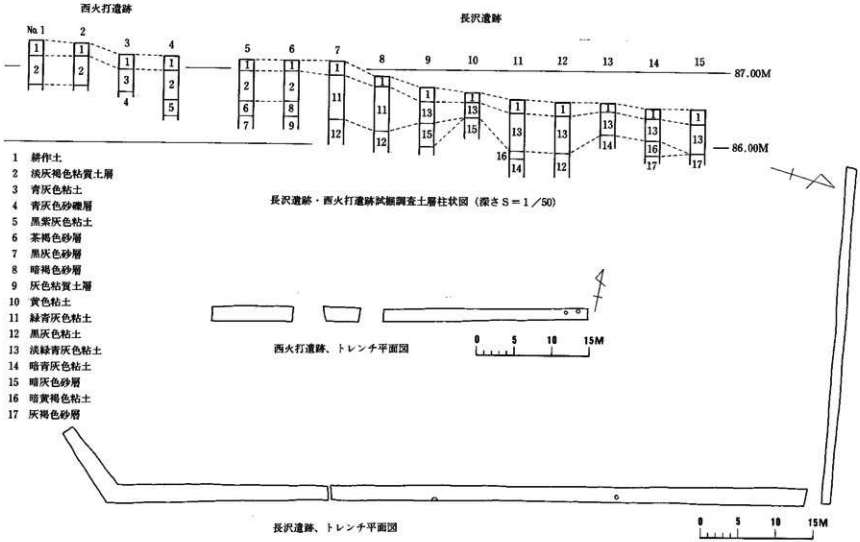
トレンチ東側の土層の堆積は、耕土・床土が約20cmあり、その下層は暗褐色粘質土層が約40cm堆積する。表土下約60cmからは淡灰褐色砂質土層となり、柱穴2基を検出した。出土遺物は認められなかった。

柱穴掘形の平面形は両者円形を呈し、直径40cmを測り、柱痕は東側20cm、西側15cmである。心々距離は1.80mで、方位はN-76°-Eを示す。この方位を南北方位にするとN-14°-Wとなり、長浜バイパス工事に伴う調査で検出されたSB1のN-8°-Wより約6度西に振る。SB1は4間×1間(9.0m×4.2m)の10世紀後半頃に比定されている南北棟の掘立柱建物で、この建物の廃絶した要因の一つに、長浜平野の条里制地割を拡大するための水田開発が上げられている。今回の調査で検出した柱穴は、時期決定には資料不足であるが、SB1と同時期に存在していた掘立柱建物とみなすことは可能であろう。

トレンチ西側は、耕土・床土が約30cmあり、その直下からは灰色砂層が厚く堆積し、著しい湧水をみる。昭和58年度の調査において砂礫層を埋土とする幅約16mの旧河道が検出され、流路方向が今回のトレンチの延長線上にあたることなどを勘案すると、灰色砂層の堆積する部分は河道跡といえる。なお、砂層の堆積するトレンチは、約50cm掘り下げた時点においてトレンチ壁が崩壊しはじめたため、それ以上の掘削を中止し、写真撮影後速やかに埋め戻しを行った。

昭和58年度の調査で確認された畦畔遺構と同形態をもつ遺構は、今回の調査では断面観察及び平面的にも明らかではなかった。トレンチを区切る壁とした現在の畦畔の位置がそのまま踏襲されていたとみられる。

第２図　長沢遺跡・西火打遺跡地形測量図及びトレンチ配置図



第3図　長沢遺跡、西火打遺跡トレンチ配置図及び土層柱状図

参考文献
滋賀県教育委員会『国道８号線長浜バイパス関連調査報告書　Ⅲ』　1973
滋賀県教育委員会・㈶滋賀県文化財保護協会『一般国道８号（長浜バイパス）関連遺跡発掘調査報告書　Ⅳ』　1987
滋賀県教育委員会・㈶滋賀県文化財保護協会『一般国道８号（長浜バイパス）関連遺跡発掘調査報告書　Ⅴ』　1988
滋賀県教育委員会・㈶滋賀県文化財保護協会『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書　ⅩⅤ-１』　1988

(3)正恩寺遺跡

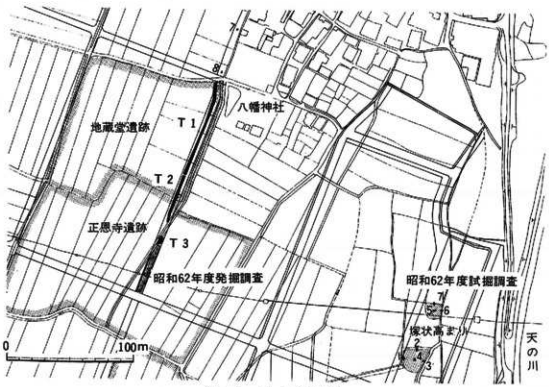
(ア)はじめに

当調査は、昭和62年度発掘調査区の東側延長部分にあたる。排水路工事に伴う調査であるため幅約２ｍの狭長なトレンチを設定し、東側からＴ１・２・３と称した。以下、トレンチ番号順に遺構・遺物について記述する。

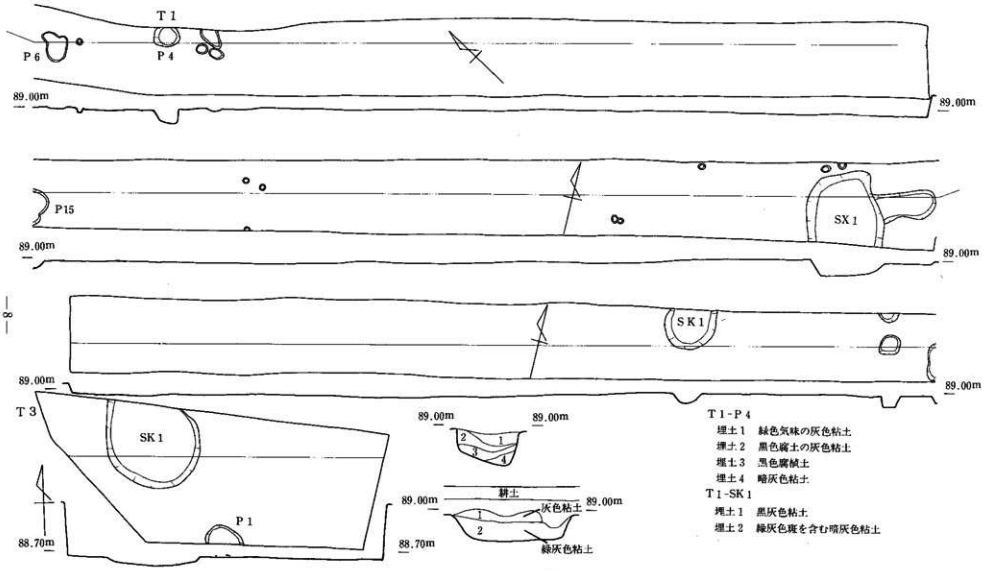
(イ)調査結果

Ｔ１

幅約２ｍ、延長約75ｍのトレンチである。基本層順は、耕土約15cm、灰色粘土約15cmであり、緑灰色粘土を遺構面形成土とする。遺構面の標高は、おおよそ88.80ｍ～88.95ｍである。検出された遺構は、ピット17個・土壙１基であり、トレンチ東端において遺構面直上に約10cmの遺物包含層が確認された。



第４図　トレンチ配置図



第５図　Ｔ１・Ｔ３遺構平面図（Ｓ＝１／100）断面図（S＝１／40）

P４　径約65cm、深さ36cmを計る円形もしくは隅丸方形のピットである。埋土は４層から成り、上層から灰色粘土・黒色腐植土を混入する灰色粘土・黒色腐植土・暗灰色粘土である。上２層からは、遺物が出土している（第６図３・４）。３は、口径8.4cm、器高1.4cmを計る土師質土器小皿である。底部から緩やかに内彎して立ち上がる口縁部の端部は押しナデが加えられており、若干内傾している。底部外面は指頭圧痕によって平滑に仕上げられている。４は、口径13.6cm、器高2.4cmを計る土師質土器大皿である。平底の底部から明瞭な屈曲を持って外方へ立ち上がる。口縁部の端部は押しナデによって形成され、若干内傾している。口縁部の成形手法は、３・４共通であり、概ね12世紀後半の土器である。

P６　P４の西方に位置する、長径約60cm、短径約50cm、深さ約３cmを計る楕円形のピットである。灰色粘土を埋土とし、土師質土器小皿が埋土上面から出土した（第６図５）。口径・器高は、９cm・1.5cmである。P４出土の土師質土器皿類と同様、口縁端部に押しナデを加えて内傾させるものではあるが、前者が尖り気味であるのと比較すると肉厚で丸味を帯びておさめている。時期はP４と同じである。

P15　径約70cmと50cmの楕円形もしくは隅丸方形の２つのピットであるが、埋土が極めて近似していたために切り合い関係は判別できなかった。深さは約20cmであり、埋土は上層灰色粘土・下層暗灰色粘土の２層によって構成されている。上層からは土師質土器が１点出土している（第６図６）。口径8.4cm、器高1.3cmを計る小皿である。平底の底部から明瞭な屈曲を有して口縁部が立ち上がり、端部に弱いヨコナデが加えられているのが丸くおさめられている。時期は、P４・６とほぼ同じである。

SK１　当トレンチで検出された遺構の西端に位置する。径約1.4mの円形土壙である。深さ約30cmを計り、底面は平坦である。埋土は黒灰色粘土・緑灰色斑を含む暗灰色粘土の上下２層ら成り、下層から遺物が出土している（第６図１・２）。１は、口径8.7cm、器高2.5cmを計る山茶碗の小皿である。回転糸切り痕をとどめる底部外面には、ローマ字のeを半転させたような"ə"の墨書が認められる。水挽きナデによって成形され、ほぼ直線的に外方へひろがる口縁端部は単純におさめている。色調は淡灰色を呈し、胎土に５mm大の砂粒を含むため底面には亀裂が生じている。２は土師質土器の大皿であり、口径15.4cm、器高2.5cmを計る。平底の底部から外方へ直線的にのびる口縁部は２段ナデによって成形され、内外面に緩やかな段を形成している。口縁端部は押しナデが加えられ、若干内傾している。底部外面は指頭圧痕とナデによって平滑に仕上げられている。１の山茶碗は11世紀から12世紀初頭に相当し、２の土師質土器も11世紀終末から12世紀初頭のものである。

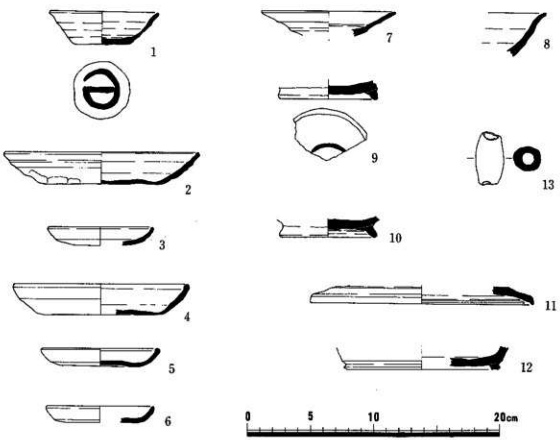
SX１　P６の西側に隣接する不定形の土壙である。方形部分が約20cm、突出部分が約5cmの深さであり、灰色粘土・暗褐色粘土の２層を埋土とする。埋土内からは、土師質土器・天目等の小片が若干量出土しており、概ね14世紀代に属する。

包含層　トレンチ東端から約２m部分が若干落ち込んでおり、遺構面直上に灰色粘質砂土から成る厚さ約10cmの包含層が確認され、須恵器・灰釉・瓦類が出土した（第６図７～12）。７～10は

灰釉である。7は、口縁端部を単純におさめ、内面に明瞭な段を有する、口径10.6cmを計る段皿である。胎土は精良で、色調は灰白色を呈するが、口縁部内面には斑点状の自然釉が認められる。8は碗の口縁部破片であり、端部を外彎気味におさめる。内面には自然釉がかかり、胎土は精良である。9・10は、碗もしくは皿の高台部破片である。9は高台径が7.8cmであり、ハの字状につく端部は丸くおさめている。回転糸切りによって切りはなされた底部外面には、墨書の1部が認められる。字形は不明であるが、SK1出土のものと同類と推定される。10も9とほぼ同様ではあるが、底部外面はナデによって平滑に仕上げられている。高台径は7.2cmを計り、共に色調は淡灰色を呈し、胎土は精良である。11・12は、須恵器の坏身・坏蓋である。11の口縁部はほぼ垂直に短かくのび、扁平な天井部は平坦である。口径は、推定で17.6cmとなる。12は、扁平な断面台形の高台がつくもので、推定高台径は11cmである。須恵器は他に数点出土しているが、いずれも11・12と同形態であり、概ね8世紀後半のものである。13は、褐色系の色調を呈する土師質の土錘である。残存長4.2cm、最大径2.1cm、内径1.1cmを計るが、調整等は磨滅が著しいため不明である。瓦類はいずれも小片であるが、後述するT3出土のものと同型式のものである。

T2

幅約2m、延長約40mのトレンチである。基本層序はT1と同じであるが、青灰色粘土を基盤層



第6図　T1出土遺物実測図（S＝⅓）

としている。耕土下の灰色粘土中からは瓦類がコンテナ約一箱分出土したが、青灰色粘土面には遺構は認められなかった。

T 3

幅約3.5m、延長約5.5mのトレンチであり、昭和62年度調査区の東側に隣接している。基本層序はT１と同じであるが、遺構面形成土は西方に行くにしたがって黄色系粘質土に変化している。遺構面の標高は概ね89.5mであり、ピット１個・土壙１基が検出された。

P１　トレンチ南壁に接して検出された、径約95cmの円形ピットである。深さは約10cmを計り、黄色斑を含む灰色粘土を埋土としている。ピットの北側部分において、平瓦が数点出土している（第８図16）。須恵質の平瓦であり、凹面は布目圧痕、凸面は縄目タタキの後横方向のナデが施され、タタキメはほとんど消されている。

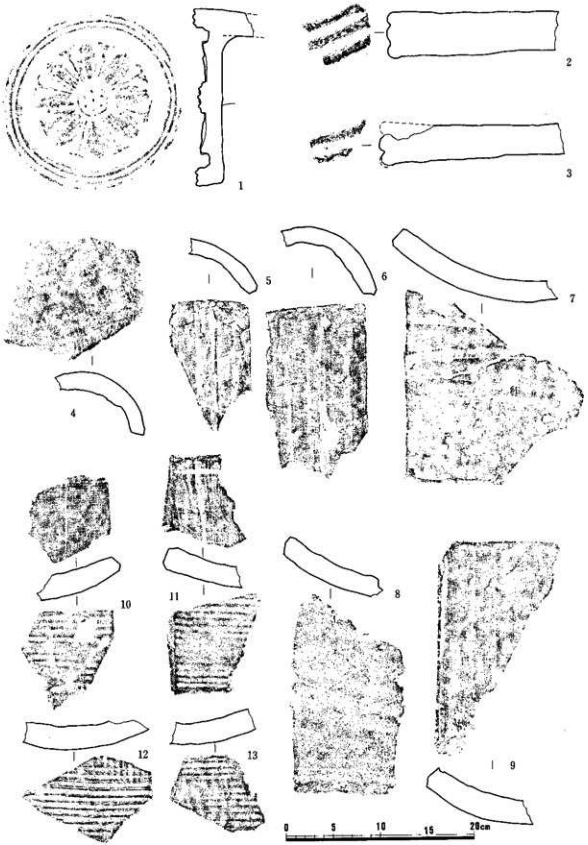
SK１　径約2.5m、深さ約10cmを計る円形土壙であり、灰色粘土を埋土としている。底面は浅い皿状を呈し、土壙内からは多量の廃棄瓦類が検出され、東側では多量かつ厚く堆積し、西側では稀少となっている。

瓦類はコンテナ箱約５箱分出土したが、いずれも破片であり完全に１枚になるものは認められなかった。代表的なものを以下に記述・図示する（第７・８図）。

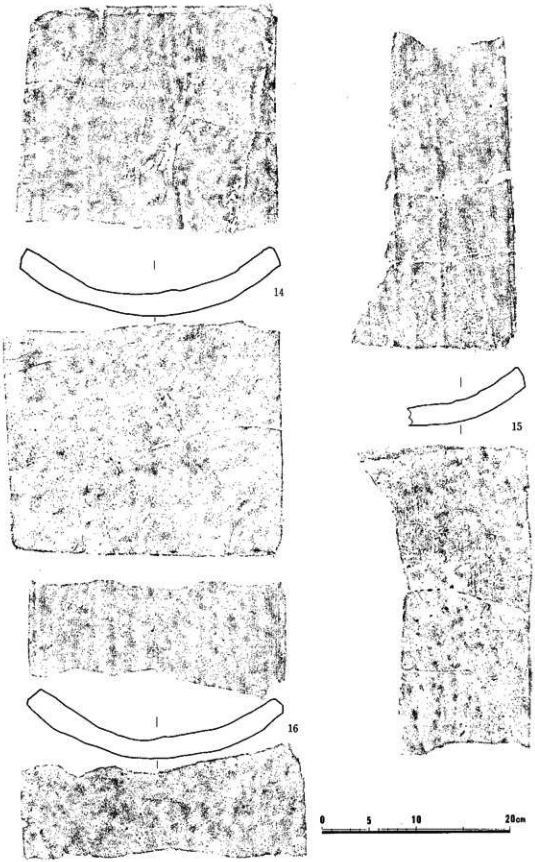
２・３は、土師質の軒平瓦である。共に磨滅が著しいため調整については不明であるが、無顎式の三重弧文である。

４～６は丸瓦であり、４は土師質、５・６は須恵質である。４は磨滅が著しいため調整は不明瞭であるが、凸面に平行タタキの痕跡が若干認められ、凹面には布目圧痕が残存している。５・６は凹面に布目圧痕を持ち、凸面を横方向のナデによって平滑に仕上げている。側面の面取りは凹面および、隅部分は更に丁寧にケズリ調整が加えられている。いずれも行基葺式の丸瓦である。

７～15は平瓦であり、７～13は土師質、14・15は須恵質である。７は凹面の布目圧痕が１部ナデ消され、凸面は板状工具による横方向のナデが施されており、１部に太い凹線状の条痕が認められる。9の凸面は横方向のナデによってタタキメが完全に消され、凹面側面沿いには棒分割突帯による分割界線が顕著に認められる。８は凸面の細い縄目タタキを、また凹面の布目圧痕をナデ消すものである。凹面には、円形に大きく窪む結節からなる分割突起による分割界点が認められる。10～13は、凸面に横方向の条痕状の調整痕が認められるものである。条痕は幅５mmであり、条痕間は２mmである。小片のため不確かではあるが、タタキではなく押し引きによるものと想定される。凹面には、いずれも布目圧痕が認められる。14は、SK１出土の瓦類の中で復原され得た最大のものである。凸面は縄目タタキの後、横方向のナデによってこれをほぼ全面に消している。凹面は布目圧痕の１部に、細いヘラ状工具によると想定されるナデが縦方向に数条認められる。凹面には、側面寄りと中央部寄りの２箇所に撚紐痕跡が認められるが、後者が分割界線であり、前者は布の端を幅せまくおりかえした部分に相当する。15も14とほぼ同型式のものであり、側面沿いの分割界線が明瞭に残存している。



第７図　Ｔ３出土瓦類実測図・拓影図(1)（Ｓ＝¼）



第8図　T 3 出土瓦類実測図・拓影図(2)（S＝¼）

SK１の西方遺構面直上からは、軒丸瓦が出土している（第７図１）。外区外縁は三重圏文であり、棒状の子葉を有する有子葉単弁８葉の蓮華文である。中房蓮子は「１＋６」であり、いわゆる「山田寺式」である。三大寺遺跡のものと比較すると、外区外縁の幅が狭い。

(ウ)まとめ

今回の調査は狭長なトレンチ調査であったため遺跡の正確な状況を把握することはできないが、今回の成果をまとめ、今後の進展の一助としたい。

大まかには、11世紀終末から12世紀後半を中心とするＴ１東半部分で検出されたピット・土壙と、白鳳期の瓦類廃棄土壙・ピットを検出したT3部分に分けられる。前者は地蔵堂遺跡の１部として捉えられる。Ｔ１では明瞭な建物等は確認されなかったが、寺院としての正恩寺遺跡の終末期以降には確実に存続していた遺跡であると言えよう。

Ｔ３-SK１出土の瓦類は、これまでに調査・採集によって集積された正恩寺遺跡の瓦類の構成を裏付けると共に、新たに２型式の丸瓦・平瓦が確認されたことは今回の調査における大きな成果である。同型式類以の平瓦は、石川県輪島市稲舟窯、奈良県斑鳩町法隆寺、熊本県鹿本郡菊鹿町鞠智城の４箇所のみが報告されているにすぎない。県内では、大津市東光寺遺跡、犬上郡甲良町長寺遺跡での出土例があり、(註) 今後当型式の瓦の制作・流通についての考察が進められることを望むものであり、これらによって正恩寺遺跡の持つ性格・位置付けがより深められることを期待するものである。

参考文献

1．『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書　XV-１』滋賀県教育委員会・㈶滋賀県文化財保護協会　1988

2．佐原　真　「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌』第58巻第２号　1972

3．滝本正志　「平瓦桶巻作りにおける一考察」『考古学雑誌』第69巻第２号　1983

註。

調査担当者岡本武寛氏、大崎哲人氏（㈶滋賀県文化財保護協会）教示。

	型式	凹面	凸面	62年度以前	63年度		番号
軒丸瓦	I。			○	○	山田寺式	1
丸瓦	I-a	布目密・模骨あり	ナデケシ	○	○	行基葺式	5.6
	I-b	布目粗・模骨なし	ナデケシ	○	○		
	II	模骨なし	ナデ	○	—	玉縁式	
	III	布目	平行タタキ ナデケシ	—	○		4
軒平瓦	I	布目		○	○	無顎式 三重弧文	2.3
平瓦	I	布目	斜格子タタキ	○	—		
	II	布目	正格子タタキ	○	—		
	III-a	布目ナデケシ	細い縄目タタキ	○	—		
	III-b	布目	やや粗い 縄目タタキ	○	○		
	III-c	布目ナデケシ	粗い縄目タタキ	○	○	一枚作りの可能性	
	IV	布目密	短小な縄目タタキ ナデケシ	○	○	樋巻作り	
	V	布目一部ナデケシ	横位ナデ	○	○	樋巻作り	7.11.12
	VI	布目	条痕	—	○		5～8

第 1 表　型 式 別 出 土 対 応 表

（丸瓦III、平瓦VI以外は参考文献1北村論文の型式分類を引用している。番号は第7・8図版中番号に対応）

第２章

国友遺跡・寺田遺跡

第２章　国友遺跡・寺田遺跡

１．は　じ　め　に

第２章では、長浜市国友町・今町地先に所在する国友遺跡および同市寺田町地先に所在する寺田遺跡の、昭和63年度に実施された県営ほ場整備事業に伴う試掘調査および発掘調査の成果を述べるものである。

国友遺跡の今年度の調査は、前年度に行われていた調査の結果から、県営ほ場整備関連事業による遺跡に対しての範囲があらかじめ判明していたので、その部分に対して発掘調査を実施したものである。

また寺田遺跡は、今年度に県営ほ場整備関連事業が始まることにより試掘調査を行い、その結果に基づき発掘調査を実施したものである。

国友遺跡の前年度の試掘調査の結果は、弥生時代後期から古墳時代中・後期までの遺構および遺物包含層が存在することを示すものであった。今回設定されたトレンチより南側の部分で行われた発掘調査では、国友遺跡として初めて古墳時代中・後期の住居跡が確認されるなど多大な成果をあげており、今年度の発掘調査でも同様な時期の遺構や、国友遺跡の性格がより明確なものとなるのではないかと予想された。

寺田遺跡に関しては、従来より試掘および発掘調査が実施されたことがなく、不明な点が多かった。昭和61年度滋賀県教育委員会発行の『滋賀県遺跡地図』には、寺院跡と記されている。このため、遺跡の性格をより明らかにするべく工事によって影響を受ける、水田、畑などに対して試掘調査を実施することになった。この試掘調査の結果、中世後期の遺構面および遺物包含層が検出された。そこで関係機関と協議の結果、本年度に当関連工事によって影響をさけることのできない箇所に関して発掘調査を実施することになった。

国友遺跡は、昭和63年４月18日より発掘調査を開始し、同年６月７日に終了した。

寺田遺跡は、昭和63年７月12日より試掘調査を開始し、同年７月14日に終了後、同年９月28日から発掘調査を実施し、同年10月25日に終了したものである。

調査は、国友遺跡については、財団法人滋賀県文化財保護協会技師奈良俊哉が、また、寺田遺跡については、同技師平井美典がそれぞれ担当者として行った。なお、寺田遺跡の試掘調査は同技師稲垣正宏が現地調査を担当した。

２．位　置　と　環　境

国友遺跡は長浜市国友町地先に、寺田遺跡は同市寺田町地先に所在する。長浜は、県の北東部、琵琶湖畔に位置し、両遺跡の立地する長浜平野は、市の北部を東から西に向かって流れる姉川に

よって形成された第四期沖積層である。

国友遺跡は、姉川の左岸、姉川の支流である草野川と姉川との合流点の南側にあって、標高105.5m付近の扇状地端部に位置している。当遺跡はこれまでに実施された発掘調査で、古墳時代初頭期の竪穴住居や古墳時代初頭期から古墳時代中期にかけての遺物を大量に包含した流路等が検出されている。[1] また当遺跡東方の森前遺跡では古墳時代初頭期の方形周溝墓群が検出されており、国友遺跡の住居群に対応した墓域として捉えられている。[2]

寺田遺跡は、沖積平野のなかに島状に分布するチャート層の１つである田村山の北側にあって、標高は89m付近に位置する。現在の寺田町集落は、下坂中町へと続く自然堤防上の微高地上に立地しており、周りは低湿地帯が拡がっている。町内には当遺跡のほかに、寺院跡とされる安導寺遺跡が存在する。

註 (1) a 浜崎哲司 『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』XV-1 1988年 滋賀県教育委員会・㈶滋賀県文化財保護協会

b 田中勝弘 『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書』X 1988年 滋賀県教育委員会・㈶滋賀県文化財保護協会

(2) 註（1）aに同じ。

第９図 国友遺跡・寺田遺跡調査位置図

3. 調　　査

(1)国友遺跡

今回の調査は、現況水田の約六反分にわたってトレンチを設定した。このため水田の高低差によって遺構面が著しく削平されている箇所があった。また、現況の水田の畦畔が遺構や遺構面を削平して、その土で作られているために、遺構の全体形が判明しなかったものもあった。さらに、設定したトレンチの東側の部分では、東隣する姉川の含流水が噴き出し、調査が春から初夏にかけての水量の多い時期とも相まって、調査最終日まできれいに澄んだ水を豊富に噴出し続け、トレンチの東側の部分は精査することさえできない状態であった。

a） 基本層位

前年度に行われた試掘調査の結果、遺構面および遺物包含層は現況の耕作土、及び床土を除去した直後に検出されており、今回の調査でも、試掘調査の結果どおりに遺物包含層を検出することができた。ここに試掘調査の精度またその重要性を伺い知ることができたわけである。よって、基本的な層位は、遺構面までは、耕作土および床土しかないわけである。

しかしながら、前述したように、現況の水田に高低差があるために、西側では、トレンチ中央部より続く遺構面が削平されて、床土を除去した後に、暗青灰色粘土層（T.P＝105.20m）が検出された。この層は、中央部で下層確認のため掘削したところ、遺構面である茶褐色粘土層の直下より検出した。この暗青灰色粘土層は、おそらくもっと東側に延びるものと考えられる。

中央部は現況の水田が高いために遺構面も保存状態が良く、ここでも床土を除去した直後に遺構面を検出した。ただ中央部南側では薄い青灰色砂層が堆積しており（厚さ３㎝程度）、この層からは須恵器小片が出土している。また、設定したトレンチの南側より、約２m程南側には、仮排水路が設けてあり、この掘削土である青灰色砂層には須恵器小片がかなり混入していた。層位的に見れば南側にある青灰色砂層は、さらに南に延びて遺物包含層を形成しているものであることを考えさせられる。

b） 遺　構

今回検出された遺構は、溝・竪穴式住居、土壙等である。現状の水田より遺構面に至るまでの深さは、平均で約30㎝であった。東側では、大量の含流水が噴出し、調査が始まってから最終の日まで噴出し続けた。この含流水は、SD-06の南端に影響をおよぼし、SD-06を完掘することができなかった。西側はこれとは逆で、常に乾いた状態であった。トレンチの中央部についても、ほぼ同様な状態で乾いていた。

現状にのこる畦畔について）　トレンチのほぼ中央を横断する形で現状の畦畔が存在している。今回の調査では、現状で残っている畦畔が東西方向に３本、南北方向に３本である。南北方向の畦畔は、東側のものについては規模も小さく、残り具合もあまり良いものではなく、今回検出し

た遺構面になんら影響をおよぼすものではなかった。西側にある畦畔も、同様であった。しかし、トレンチ中央部に残る畦畔は残り具合も良く、作り方も杭を用いるなどして頑丈に作り、直接遺構面に影響を及ぼすものであった。さらに、これらの畦畔を断面観察した結果、弥生時代後期から古墳時代前期の遺物を相当量含んでいた。また、土壙は赤褐色の非常に堅くしまったもので、よほど上部からたたきしめられたものであることがわかった。特に中央に位置している南北方向の畦畔は、長さが42m、上幅30cmのもので、遺構より約40cm程の高さがあった。この高さについては、バックホーによってかなり削平したために、正確な数値とはいえない。この畦畔は、両側の遺構をかなり削平して作ったと考えられ、SK-06や、小ピット群を切っていた。南側にある南北方向の畦畔は、SH-01、SH-03、SH-04、SD-07を切っており、やはり土器などの遺物を相当量含んでいた。

以上の様に、現状の畦畔が弥生時代後期より古墳時代前期の遺物を相当量含み、さらにそれらの時期の遺構を切って作られたことを説明した。しかし、これらの畦畔がいつ作られたのかを示すものは何もなく、時期を決定することはできなかった。次に、各遺構毎に説明する。

SD-01　SD-01は、トレンチの北西にある溝で、長さは28mである。この溝は、「へ」の字状に曲っており、途中で2箇所ほど切れてしまう。SD-01の西端付近では、少量ではあるが形の復原できる弥生式土器が出土している。この溝は、西側の部分では2条の溝が分かれて存在するようにも見えるが、これはただ単に、SD-01の中央部にブロック状の高まりがあるためである。東側では深さが約10cmと浅く遺物もないが、西側では最大幅が2mで、深さも21cmと深くなっている。

SD-02　南北方向に走る溝である。長さは4m、幅は約5mである。遺物はなかった。

SD-03　北北西の方向に走る溝である。長さは5m、幅30cm、深さは10cmである。弥生時代後期後半かと考えられる土器小破片が数点出土している。

SD-04　ほぼ南北方向に走る溝である。長さが2mほどしかなく、幅も20cmで、深さ約9cmである。土器小破片が出土したが、時期不詳。

SD-05　北北西の方向に走る溝である。長さ2.2m、最大幅60cmで、溝というよりも土壙という感じを受けるものである。

SD-06　南北方向に走る溝で、土器が集中して出土している。長さは17.4m、幅約60cm、深さ30cmである。この溝からは一律して土器の出土が見られ、土器の残り具合も良かった。東西方向に走る現状の畦畔に、ほぼ中央で切られており、その部分では溝の肩も明瞭に残ってはいなかった。土器からすれば、弥生時代後期後半のものが主流をなしており、一部古墳時代に入るものがある

と考えられる。この溝は、さらにSD-08によっても切られている。

SD-07　長さ約18m、幅約60cmで、深さ約30cmである。SD-07は、SD-06とほぼ平行した南北方向の溝である。東西方向に走る畦畔によってほぼ中央部が切られた状態になっている。ここからも土器が集中して出土しているが小片が多かった。出土している土器から弥生時代後期から古墳時代初めのころではないかと考えられる。

SD-08～13　設定したトレンチの北部地区で検出されたものである。SD-09については、弥生時代後期と考えられる土器片が少量ではあるが検出されている。その他の溝については遺物は検出されなかった。

SD-14・15　SD-14・15はともにSH-01からのびてくる溝である。

SD-14は、長さ約13m、住居跡内での幅約20cm、深さ15cmである。当初、住居跡内の壁溝として検出していたものではあるが、明らかにSH-01の肩部を切り、さらに北側にのびることがわかり検出していったものである。この溝はSD-15も切っている。土器は小片が2～3点検出されただけであった。

SD-15は、SH-01の壁を切り込み、SH-01のベッド状遺構の北側下部に一部続いているものである。東西方向に走る畦畔によって、SH-01とSD-15の一部を切っており、詳細については不明な部分も多い。長さは約13m、幅約40cm、深さ15cmである。また、SD-14によってSD-15は切れている。遺物は、数点出土しており、弥生時代後期と考えられる。

SK-01・02　トレンチの北西端部に検出されたもので、当初住居跡かと考えられたが肩部などが不明瞭で、浅く、規模も小さいために土壙とした。遺物は土器小片が2～3点出土し、弥生時代後期と考えられる。

SK-03　トレンチの南西部で検出されたもので、不定形である。やや円形に近いので、径を測れば長径で2.2mで、深さ15cmである。遺物は土器が集中で出土しているが、いずれも小片で、壊れた土器を投棄した感じを受ける。土器の年代は、弥生時代後期から古墳時代初頭であり、時期的に混在している。

SK-04　トレンチの西部で検出された、長円形の土壙である。長径1.8m、短径1m、深さ30cmである。遺物は小破片のみで、時期については不明である。

SK-05　SK-04の東南部で検出した円形の土壙である。径約1m、深さ約15cmである。遺物は、古墳時代初頭の壺の体部や底部が数点出土している。

SK-06　東西方向に走る南側の畦畔に切られた形で検出された。一辺の長さが約3.6mもあり、土壙というより住居跡かとも考えられるが、畦畔によって切られており、さらに畦畔の南側でも検出されなかったので土壙とした。西側がピットで切られているが、このピットは畦畔に伴うもので、新しい時期のものである。SK-06からは遺物は出土していない。

SK-07　トレンチの北部地区で検出した方形の土壙である。一辺の長さは1.4mで、最深部で28cmである。土壙内は段状になっており、最深部より土器片が数点出土している。古墳時代初頭のものか。

SK-09・10　トレンチの北部地域で検出された土壙である。SK-09は不定形に近い円形のもので、SK-10は方形に近い形状をなす。両方とも土器小破片が出土したが、時期については磨滅しているために良くわからなかった。

SH-01　一辺が5.4mの隅丸方形の竪穴式住居である。深さは20cmで、東南西の壁は明瞭に残っていた。東側には幅約80cm、床面よりの高さ15cmのベッド状の遺構がある。床面よりピットが4箇所検出されたが、この竪穴式住居の支柱穴ではないように考えられる。壁溝はベッド状遺構の下部、南辺、西辺にあり、西辺の壁溝は北辺の不明瞭な壁を切り抜いて、さらに北側に延びていくものである。南側の壁溝は、ベッド状遺構下部より南辺を通り、中央より曲って内側にやや幅が広がりながら延びてしまうものである。北辺については畦畔によって切られており、必ずしも明瞭なものではなく、一部壁溝と考えられる溝があるのみで、肩部などについては推測の域を出ない。しかし、ベッド状遺構下部にある壁溝より北側に延びる溝が、畦畔に切られながらも存在し、土器も検出されている。この溝がSD-15になるわけである。SH-01中央部にあるピットは浅いもので形状も不定形である。SD-01の埋土は、黒褐色土層で、床面は青灰色粘質土である。部分的に床面を掘り下げてみたが、貼り床などは検出できなかった。

SH-02　円形の住居跡のうち、半円形部分のみ残るものである。直径は4m、深さは約15cmである。南北方向に走る畦畔によって切られており、この畦畔の西側では畦畔作成時による撹乱によって残ってはいない。埋土は、黒褐色粘土層で一層のみとなっている。この埋土からは多量の土器片が出土している。さらに、床面からも遺物は出土している。支柱穴と考えられるピットは無かった。

SH-03　一辺2.6m×2.6mのほぼ正方形に近い竪穴式住居である。北辺にある2つのピット、南東部にある土壙状のピットが支柱穴になると考えられる。東南部にある不定形の土壙状のピットからは土器が出土している。完形品になり得るものではなかったが、弥生時代中期にあたるもの

と考えられる。この住居跡も埋土は黒褐色粘土層の一層である。壁溝等はない。支柱穴の大きさは、北辺にある2つの径が約20cm程で、深さも5～14cm程で浅いものである。東南の隅にあるピットは径が24cm程で、深さが約23cm程であった。

SH-04　一辺5.4mの隅丸方形の竪穴式住居である。住居内には9箇所のピットがある。いずれも径が20～30cm程のもので、深さも5～17cm程と浅いものばかりである。また東西方向の畦畔によって約3/4程は切られている。畦畔の北側では住居の続きの遺構は検出されておらず、住居跡平面プランが長方形を示すものかも知れない。また、南辺中央部にある土壙は、一辺1mの方形に近い形状のものであるが、深さは11cmと浅く、土壙というよりちょっとした落ち込みという感じである。しかし、この落ち込みからは土器がまとまって出土しており、土器は弥生時代中期末のものであることがわかる。

c）　出土遺物

今回出土した遺物は、いずれも弥生時代中・後期から、古墳時代前期にかけてのものであった。なかでも、SD-06から出土した遺物は土器ばかりであったが、比較的まとまった資料であり、遺物の復原もかなりできた。ここでは、遺構毎に出土した遺物を説明しよう。

SD-06出土土器（第15図）

SD-06からは、細片も含めればかなりの量(遺物コンテナ10箱分)が出土している。しかし溝という遺構の性格からしても、復原し得ないものが多かった。ここでは、復原できたものについて説明する。

甕―①～⑤、⑬　①～⑤の甕は、口縁部の形状が受口状を程するものである。強く張った胴部から頸部を外反させ、口縁端部を垂直につまみ上げる。①、④は口縁端部をナデて内傾させた面をもつ。③は口縁部外面に、④は口縁部外面と肩部に刻目文が施されている。⑫、⑬は口縁部が「く」の字形に外反する甕である。⑬は胴部は内・外面ともにハケ目調整している。口縁部はきれいにナデている。復原口径18.8cm、胴部最大径26.2cmである。

壺―⑥，⑦，⑧，⑩，⑪　⑥は球形の体部を持ち口縁が直立するもので脚がつくものである。⑦は広口壺で肩部に刻目文が施されている。⑧は小型の壺で、完形品である。ゆるやかに内彎した胴部よりやや外に開き気味に頸部を立ち上がらせる。内・外面ともナデによる調整を行っている。⑩・⑪は口縁部のみで全体形は知り得なかった。⑩は外に開いた頸部より口縁部を垂直に立ち上がらせた形状を取っている。口縁部外面に刻目文を施し、内・外面ともにナデ調整である。口縁部は丸くおさめている。やや肥厚気味か。⑪は、垂直に立ち上がった頸部が口縁部より外に大きく開き、口縁端部は、貼り付けて肥厚させ、垂下口縁を作り出している。口縁端部外面には平坦な面をもつ。内・外面ともナデ調整である。

鉢―⑦～⑨、⑮　⑦～⑨は、受口状の口縁を呈するものである。⑦、⑨と⑧を比較すると⑧の方が頸部が長く、口縁部をやや内彎させている。⑦、⑨は復原口径が13.2～14.6cmであるが、⑧

は 19 cmと大きめである。⑦は、肩部には凹線文と、刻目文が施されている。胴部内面は、調整不明である。⑧は、内・外面ともにハケ目調整である。⑮は、胴部が外側に開きながら立ち上がり、口縁端部をやや垂直気味に立たせたものである。底部には径1cmの穿孔があり、内側より穿たれたものと考えられる。口径16.8cm、器高9.7cm、底部径は4.2cmである。

高杯―⑨、⑭、⑰、⑲、㉑～㉓　高杯完形品は⑨と㉓だけで、あとは杯部のみか、脚部のみであった。⑨の脚部の接地面はやや丸味を帯びるもので脚にはヘラミガキが残る。⑭、⑰は杯部のみで、⑰は外面に丁寧なヘラミガキが施されている。SD-06出土高杯の中では大型品である。⑲、㉑、㉒は脚部のみである。㉑、㉒は三方に径1.1～1.2cmの円形の穴をあけている。㉑は外面全体に丁寧なミガキが施されているが、㉒は器面が荒れていることもあって、上部のみにミガキの痕跡が残存している。㉓も器面が荒れており、調整については不明だが、脚部には径約1.1cmの円形の穴を三方にあけている。復原口径11.2cm、器高15cmである。

器台―⑯、⑱、⑳　器台については、完形品はなかった。⑯は受部のみで、内・外面ともにヘラミガキが施されている。復原口径19.1cmである。⑳は脚部から受皿部にかけて残存するものである。径1.1cmの円形の穴が三方に施されるものと考えられる。外面には一部ヘラミガキが残るが、器面が荒れていて詳細は不明。⑱は器台の脚部としたが、詳細については不明。

SD-01出土の土器　SD-01からは、壺と脚部が出土している。壺㉔は広口壺の口縁部のみである。㉕、㉖は脚部のみの出土で、全体形は不明であるが、㉕は壺か甕の脚で、㉖は高杯の脚であろうか。

SD-02出土の土器　SD-02からは壺㉗が1点出土している。㉗は体部中央が膨らむもので、外面にはハケ目調整が残っている。

SH-01出土の土器　SH-01からは、甕、広口壺、高杯、鉢などが出土している他に復原こそし得なかったが甕の胴部片も多数出土している。これらの土器はすべて住居内の埋土中から出土しているものである。㉗は台付埦で、内・外面ともヘラミガキが施されている。㉘は口縁が「く」の字に曲る甕で、外面にはハケ目が施されている。㉙は広口壺で、口縁部は垂直に立ち上がり、口縁端部は強くナデられ内面に面をもつものである。肩部外面にハケ目が施されている。㉚は、高杯で口縁端部外面には4条のヘラ描き沈線を施し、内面はヨコナデ、外面はヘラミガキが施されている。

SH-02出土の土器　SH-02からは、甕、壺、高杯、底部片などが出土している。㉛、㉜は甕で、㉛は口縁部を「く」の字に屈曲しているもので、口縁端部外面下方に刻目文が施されており、口縁端部をやや肥厚させている。㉜は口縁部を外側に開き、端部を直につまみ上げている。㉝は細頸壺の口縁部付近のみである。㉞は高杯の脚のみで、四方に円形の透かしをもつものである。㉞、㉟は底部のみで、両方ともに外面にはハケ目調整をもつ。

SH-03出土の土器　SH-03からは埋土中より多数の土器片が出土したが復原し得なかった。そのほとんどは甕の胴部と考えられる。㊱も甕と考えられるが、残り具合が悪く傾きなどに不安が残る。

SH-04出土の土器　SH-04からは、甕とその底部が出土している。㊲、㊴ともに「く」の字に口縁部を屈曲させたもので、㊲の胴部には、2段にわたって刺突文がつく。㊴の胴部にもハケによる刺突文がつく。㊴の底部は、外面にハケ目が施される。

SK-03出土の土器　SK-03からは土器の小片が多量に出土しているが、復原し得たのは2点のみであった。㊹は高杯の杯部で内・外面ともに丁寧なヘラミガキが施されている。㊸は脚部のみで、接地面は丸く収められている。

その他の出土遺物　竪穴式住居周辺からは、遺構面直上より多量の土器が出土している。その中で復原し得たものを図示した。

㊶は丸底の底部のみで内・外面ともにハケ目調整が施されている。㊺は甕で、口縁部が段をもつようになっており、端部を直に上げて丸味を持っている。㊽は広口壺の口縁部で頸部に貼り付け凸帯文がある。㊼は小型の壺になるものであろうか。㊷、㊾は器台の脚部で、内・外面にヘラミガキが施されている。又、三方向に円形の透かしが施されている。㊻、㊿、(51)は高杯の脚部である。(54)、(53)には三方向に円形の透かしが施され、(49)、(51)は内・外面ともにヨコナデ調整である。(52)は外面にヘラミガキ調整が残る。3つとも接地面は、平坦な面をもっている。

d）まとめ

今回検出した遺構は、すべて居住区に係るものばかりであった。前年度の調査では、周辺遺跡も含めて調査が行われたために、居住区と墓地のセットで考察がなされた。そこで今回は、前年度の資料整備ということでまとめてみたい。

先ず検出された遺構・遺物の時期についてであるが、SD-01・02およびSH-02・04から出土している土器を見てみると、概ね弥生時代中期末を考えることができる。(31)、㊲の「く」の字に口縁が屈曲した甕がその代表的なものとしてとらえられる。この時期のものは、前年度の調査では森前遺跡で遺物が確認されただけであった。

次に、SH-01・03出土の遺物を見てみると、古墳時代初頭であり、前年度作成された編年試案によれば3期にあたるものと考られる。3期は森前遺跡から、国友遺跡へ居住区が移動した時期として捉えられている。また、多量に遺物を出土したSD-06は、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけてのものが多く、時間的にはある程度の幅をもつものとして考えられるが、この埋没期は編年試案3期として差しつかえはないであろう。さらに、SK-03も同じく3期として考えられる。

このようにみてみると、今回検出した遺構・遺物の年代は大きく2つに分類できる。

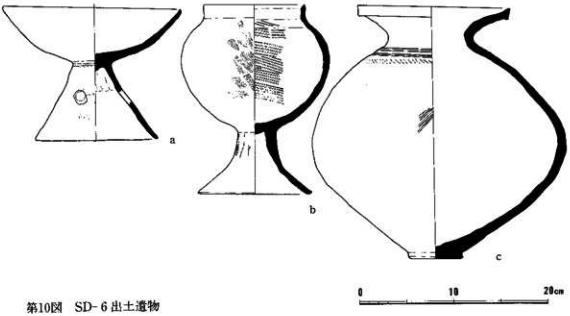
①弥生時代中期末　SD-01・02、SH-02・04等

②古墳時代初頭　SD-06、SH-01・03等

①のグループは、これまで国友遺跡としては明確なものではなく、上述したように森前遺跡でのみ土器が確認されているにすぎなかった。しかし、今回の調査で、弥生時代中期末には、もうすでに集落が存在することが確認されたのである。

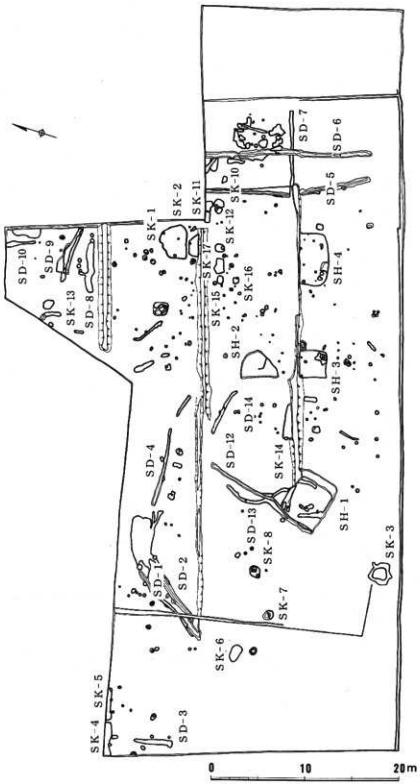
②のグループは、編年試案3期にあたるもので前年度の調査でも、竪穴式住居が検出されてお

り、今回検出したSH-01・03とほぼ同時期のものである。前年度よりさらに北側に集落が延びると考えられる。また、前年度の調査および昭和50年度に行われた調査の遺物量からみてこの3期に国友遺跡の集落としての最盛期を迎えると考えられる。

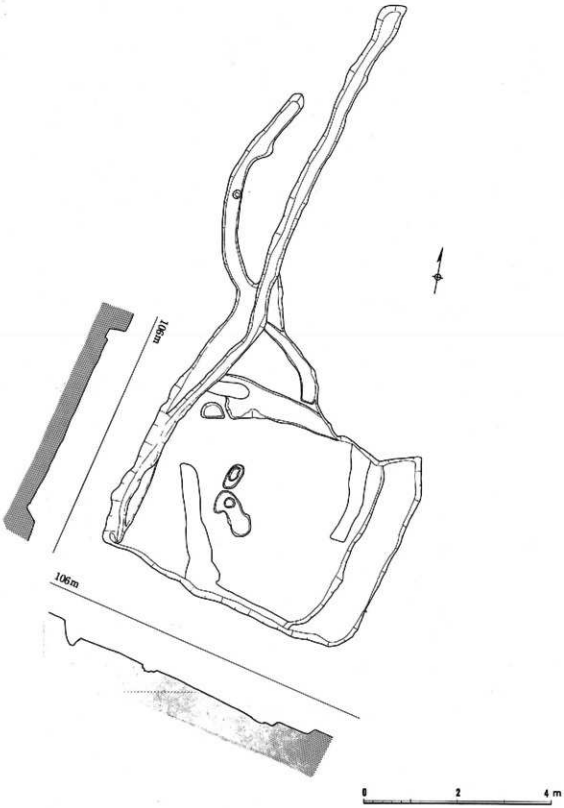


第10図　SD-6出土遺物

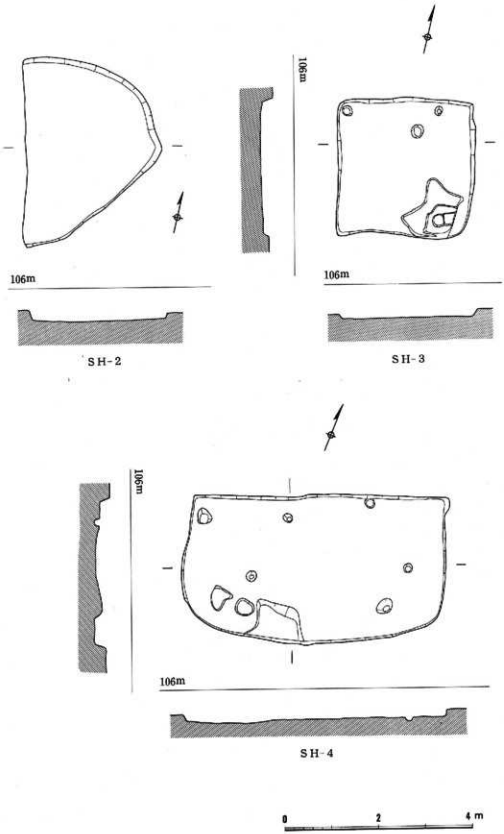
第11図　トレンチ配置図


SD-10
SD-9
SK-13
SD-8
SK-1
SK-2
SK-11
SK-10
SK-12
SK-17
SK-15
SK-16
SD-1
SD-6
SD-5
SH-4
SH-2
SH-3
SD-14
SD-12
SK-14
SD-4
SD-13
SK-8
SD-11
SD-2
SK-7
SH-1
SK-3
SK-6
SK-4
SK-5
SD-3
0
10
20m

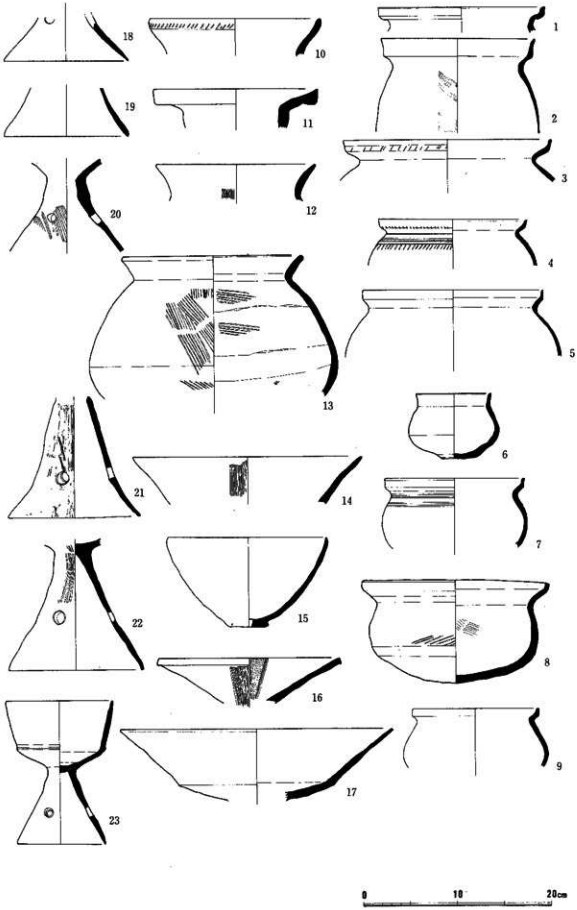
第12図　平面図



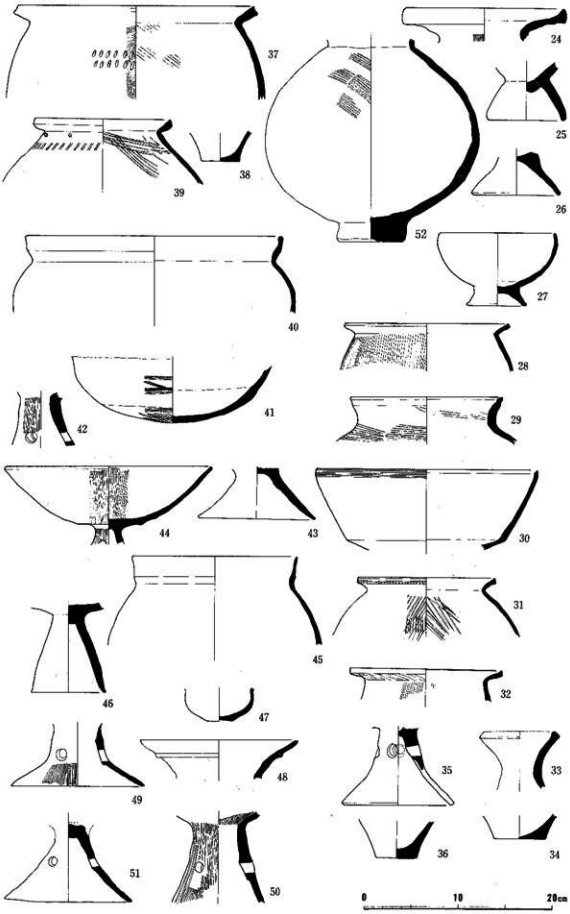
第13図　SH-1遺構図



第14図　SH-2・3・4遺構詳細図



第15図　SD-6出土遺物



第16図　各遺構出土遺物

(2) 寺田遺跡

今回行った発掘調査は、切土および排水路部分の５箇所を対象とし、それぞれ第１トレンチから第５トレンチとして実施した。0.4m²級バックホーによる表土除去の後、人力により精査し、写真・実測図による遺跡の記録化を図った。以下、各トレンチ毎に調査の結果を記述する。

(a) 第１トレンチ（T・１）

東西約20m、南北約18mで設定したトレンチで、調査前は西側の水田面より0.9mの比高差をもつ畑地であった。基本層序は、厚さ0.2mの耕作土の下に、遺物を包含する黄褐色土層が0.4～0.6mの厚さで堆積しており、その下が褐色砂礫・淡緑色シルトをベースとする遺構面である。包含層には後述する土器類のほかに、近現代の陶器片がわずかに包含されていた。地元の人の話では、昭和期に造成のために入れられた客土であるとのことである。検出した遺構は、溝状遺構（SD）３条・落ち込み状遺構（SX）１基・ピット数基である。

ⅰ） 遺構

SD-１　東西方向にのびる溝で、SX1を切り込み、SD２に切られる。幅0.6m、深さ0.05mを測り、底面のレベルは、東から西へわずかに低くなる。遺物は土師器の細片の出土をみたが、時期等は不明である。

SD-２　幅0.25m～0.3m、深さ0.05mを測り、コ字形に屈曲する。遺物の出土は無かった。

SD-３　幅0.15m～0.25m、深さ0.05mを測り、コ字形に屈曲する。遺物の出土は無かった。

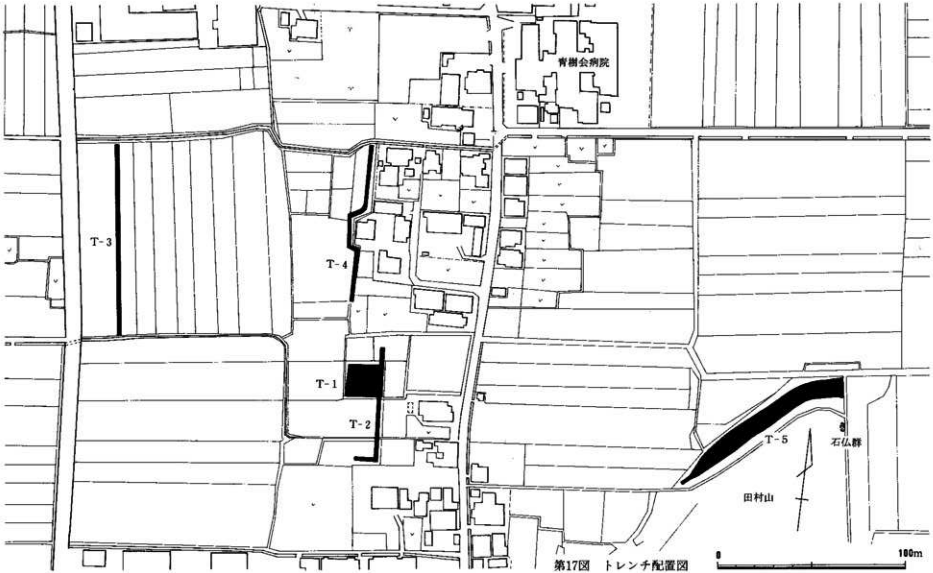
SX-１　トレンチの北端中央部付近から南北方向に溝状にのび、トレンチ南側で拡がり緩やかに落ち込む。底面のレベルは、溝状部分の北側から落ち込み部の南側にかけて徐々に低くなり、溝状部の深さは0.2mを測る。埋土中から灰釉陶器・土師器小皿の土器類と、鉄滓が１片出土している。

ⅱ） 遺物

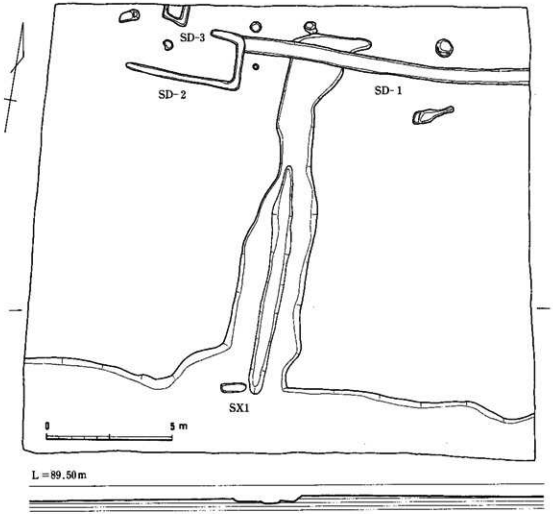
SX-１　灰釉陶器碗・皿（１～６）、土師器小皿（10・11）が出土している。

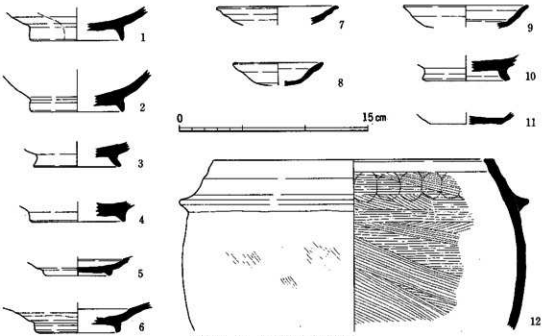
灰釉陶器碗には、高台がやや内彎気味で高いもの(1)、わずかに内彎するもの(2)、外反するもの(3)、断面形が三角形を呈し低いもの(4)がある。（１～３）の底部外面には回転糸切り痕を残す。（５・６）は灰釉陶器段皿である。(5)の高台の断面形は台形を呈す。底部外面に回転糸切り痕を残す。(6)は内彎気味の高台をもつ。土師器小皿(7)は口径9.4cmを測り、口縁は直線的に開き端部は横方向に摘み出される。(8)は口径7.0cm、器高1.8cmを測る。口縁は緩かに外方へ屈曲する。

包含層　灰釉陶器（９・10）、青白磁皿(11)、土師器羽釜(12)が出土している。灰釉陶器碗(10)の高台は外反し端部に面をもつ。青白磁皿(11)は底径5.6cm、底部の厚さ４～５mmを測る。内面の屈曲部に沈線が廻る。素地は白色で、釉調は半透明の淡い空色を呈す。土師器羽釜(12)は球形の体部に内傾する口縁部を有し、口縁端部は平坦である。口径は22.4cmを測る。調整は体部内面はハケ調整が施され、口縁部内面に指頭圧痕が残る。体部外面は剥落が著しいが、部分的に擦痕状のハケ目が



第17図　トレンチ配置図





第18図　T-1出土遺物実測図

観察される。口縁部外面および口縁端部内面はヨコナデ調整である。

第1トレンチから出土した灰釉陶器（1～6・9・10）はいわゆる折戸53号窯式に相当すると考えられ、10世紀～11世紀半頃に比定される。土師器小皿(7)は11世紀後半、(8)は15世紀、羽釜(12)は12世紀にそれぞれ位置付けられる。

b）第2トレンチ（T・2）

厚さ0.2mの耕作土下は灰色細砂層であり、激しい湧水をみた。明確な遺構は検出されず、遺物の出土もなかった。

c）第3トレンチ（T・3）

厚さ0.2mの耕作土下は灰色砂礫層であり、耕作溝と考えられる小溝を検出したほか、明確な遺構・遺物は検出されなかった。

d）第4トレンチ（T・4）

現在の集落である微高地と西側の水田部との境界部に南北に設定したトレンチである。微高地部の西端部にあたる当トレンチの南側3分1の部分の基本土層は、1層―耕作土（0.2m）、2層―黄褐色土（0.35m）、3層―灰色シルト層（0.15m）で、その下に灰色砂層が拡がる。2層および3層から青磁椀(13)および須恵質土器・陶器の破片が出土している。

低湿地部にあたる、当トレンチの北側3分の2の部分は、厚さ0.2mの耕作土の下に灰色シルト層が拡がり、その更に下層は灰色砂礫層となる。耕作土の直下から、近世のものと考えられる信楽焼摺鉢の破片が出土している。

当トレンチの北半部は湧水が著しい。

i） 遺構

明確な遺構は検出されなかった。

ii） 遺物

(13)は龍泉窯系青磁の碗である。高台径5.2cmを測る。底部外面の釉は蛇の目状に削りとられ、底部外面および高台内壁に三ッ又トチ痕が残る。見込み中央部には花文が施される。灰色の素地で、釉調は半透明の緑灰色を呈す。

e）第5トレンチ（T・5）

田村山の北側山裾に設定したトレンチである。基本土層は、厚さ0.4mの表土下に黄褐色土層が0.4mの厚さで堆積しており、その下は褐色砂礫層となる。表土中から瓦質土器(14)が出土した。石仏(15)・五輪塔(16)は表面採集されたものである。黄褐色土層中から須恵器甕の破片が1点出土している。

i） 遺構

明確な遺構は検出されなかった。

ii） 遺物

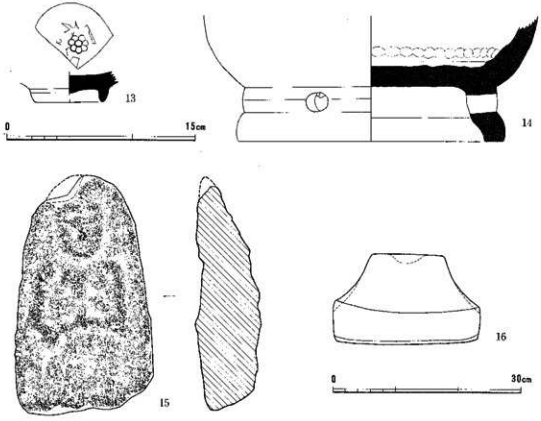
瓦質土器火舎(14)は球形の体部に屈曲する高台をもつ。高台には三方に円形透しが穿たれる。外面は丁寧な横方向のミガキ調整が加えられ、底部外面は回転ナデ調整である。(15)は弥陀一尊座像

石仏である。高さ38.0cmを測り、顔が表現される。裏面は打ち欠き痕をそのまま残す。(16)は組合せ式五輪塔の笠で、上辺長11.4cm、底辺長23.0cmを測る。上面には風輪を受けるための円形の窪みがある。時期については、(14)は近世以降、(15・16) は、15～16世紀頃に比定されよう。

まとめ

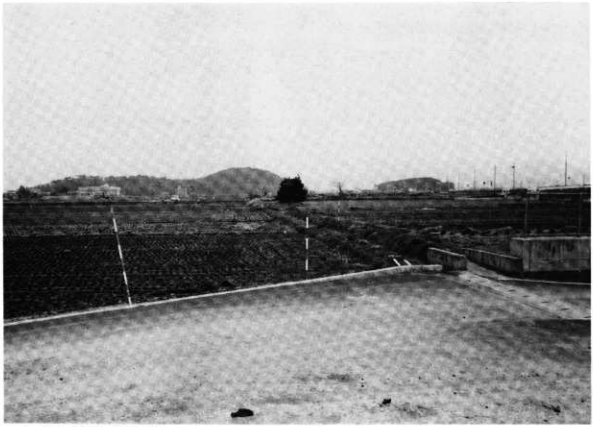
調査の結果、当初予想された寺院跡は確認されなかったが、第1トレンチでは中世期の遺構が、第1・第4・第5トレンチにおいては、平安時代から近世にかけての遺物の出土があった。当該期の遺構については自然堤防の微高地上に立地する現在の寺田町・下坂中町の集落地と重複して存在するものと考えられる。また墓域と考えられる四村山の麓には石仏や石製供養塔が随所にみられ、現在も墓地として使用されている。また、第5トレンチから出土した須恵器片は後期古墳の存在を示唆するものである。

以上のように、検出された遺構や遺物は少なかったが、今回の発掘調査が当地の歴史を知る上での一助となり得たと考える。



第19図　T－4・T－5出土遺物実測図

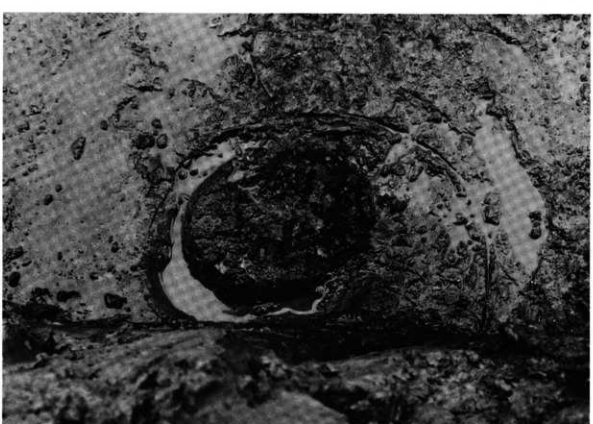
図　　版



1．調査地遠景（南から）

2．調査風景

1．Aトレンチ（北から）

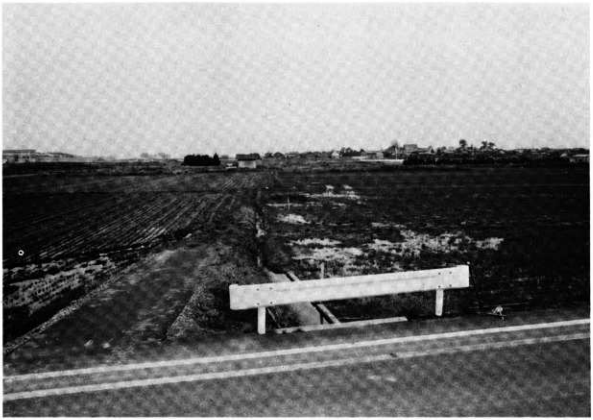


2．Aトレンチ柱痕

1．Aトレンチ柱穴

2．Bトレンチ（西から）

図版四　西火打遺跡

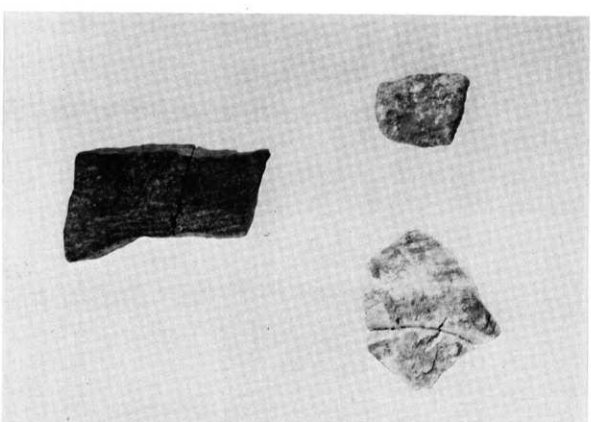


1．調査地遠景（東から）

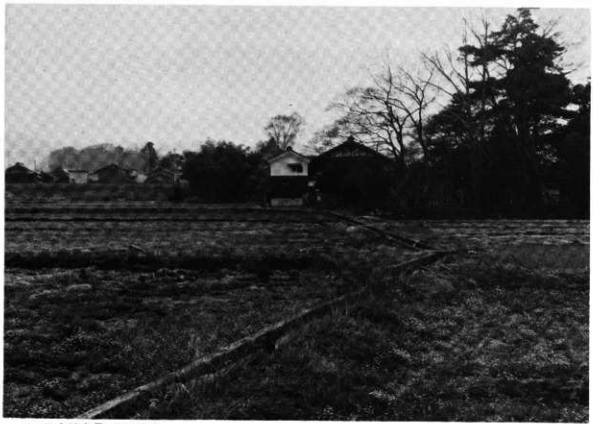
2．トレンチ（東から）

図版五　長沢・西火打遺跡

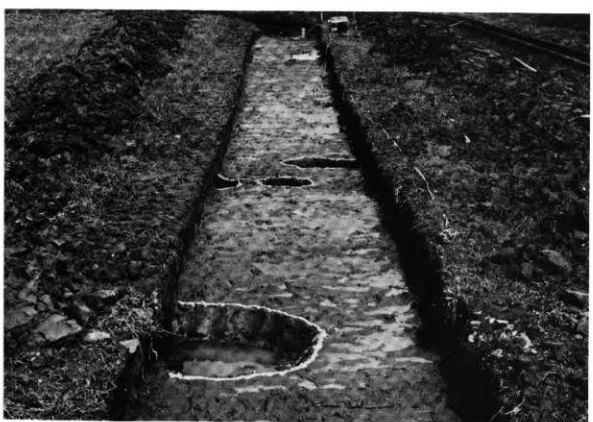
1．西火打遺跡柱穴



2．長沢遺跡出土遺物



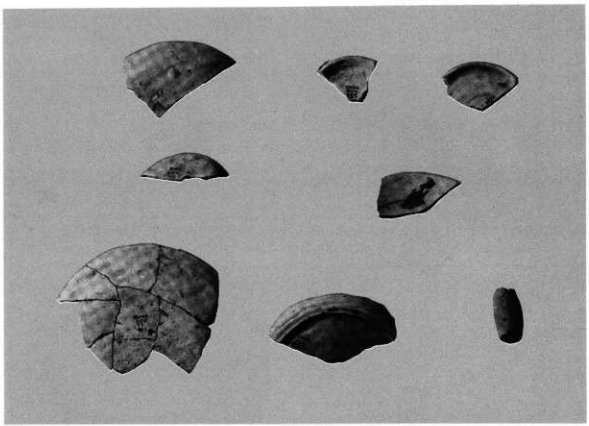
1．調査前全景（西から）



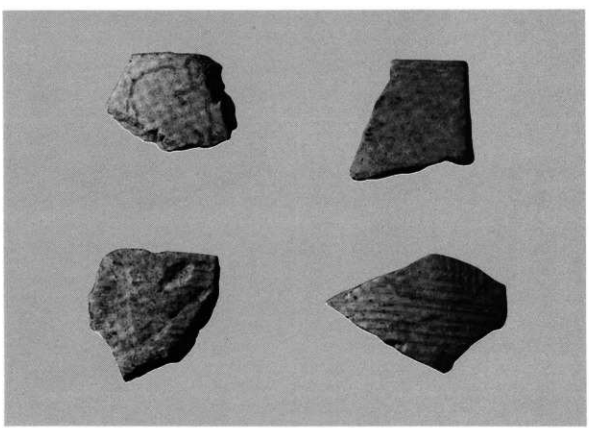
2．T1遺構完掘状況（西から）

1．T3－SK1全景（西から）

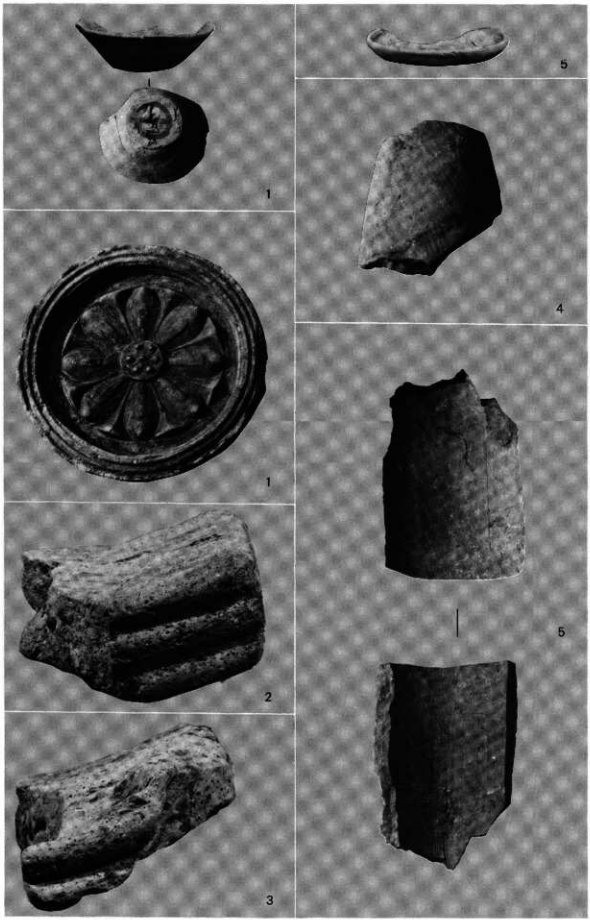
2．T3－SK1瓦類出土状況（北から）



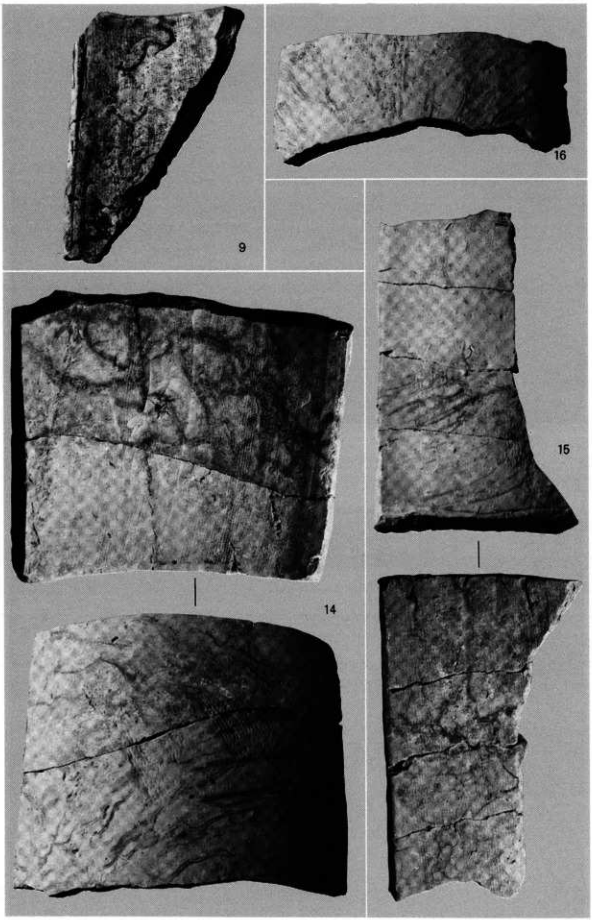
1．Ｔ１出土遺物



2．Ｔ３出土瓦類1)（条痕を持つ平瓦）



T１出土土器・T３出土瓦類(2)



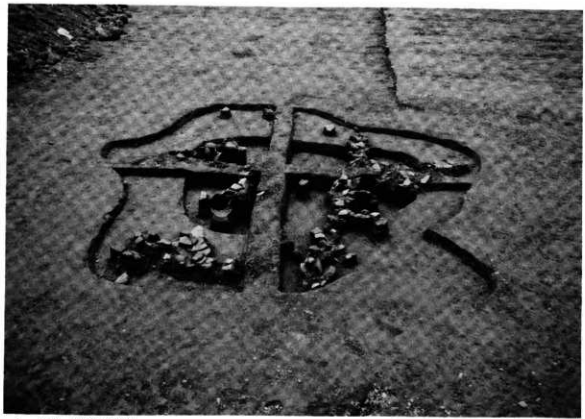
T３出土瓦類(3)

1．発掘調査前風景（東から）

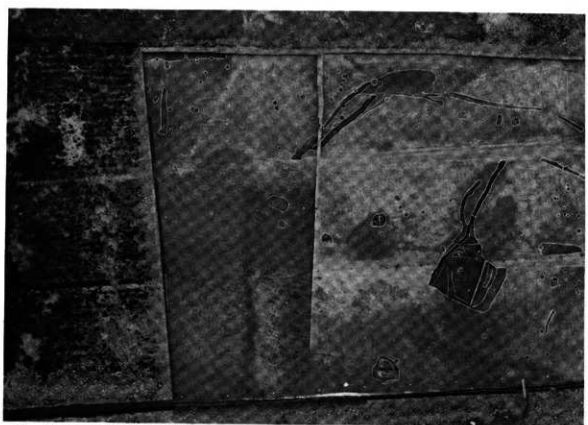
2．遺跡全景（南から）

1．SK－3遺物出土状況

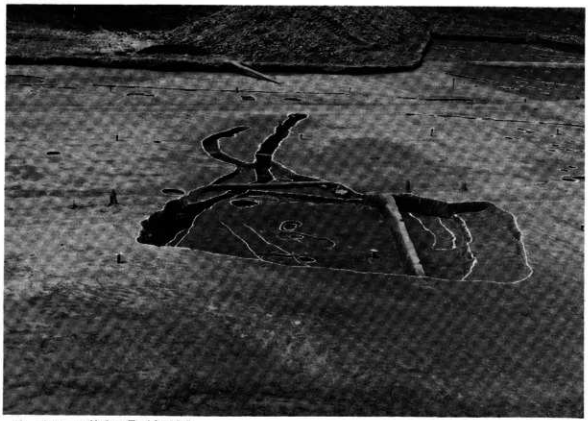
2．SK－3検出風景



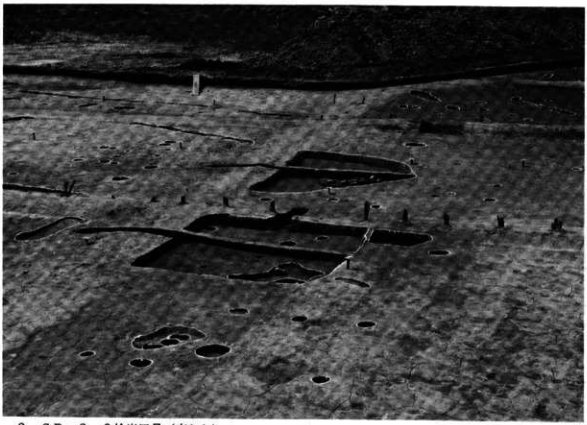
1．ＳＫ－３検出状況



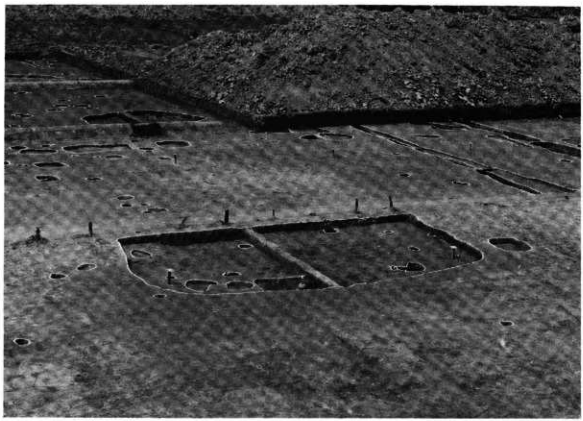
2．トレンチ西側遺構検出風景



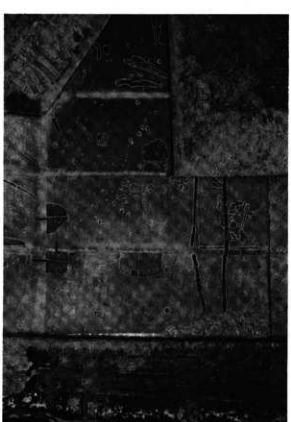
1．ＳＢ－１検出風景（南から）

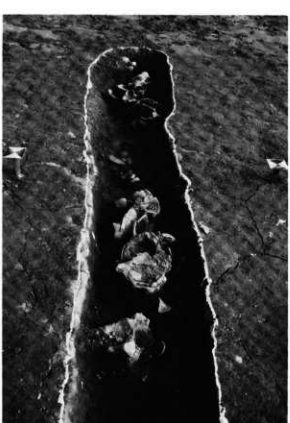


2．ＳＢ－２、３検出風景（南から）

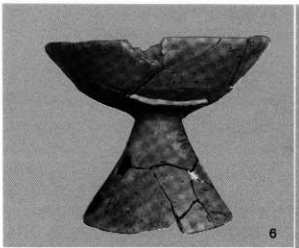


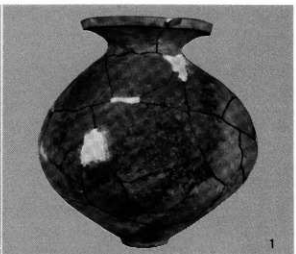
1．ＳＢ－４検出風景

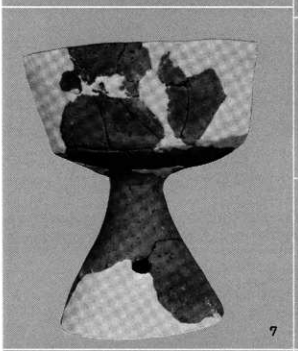


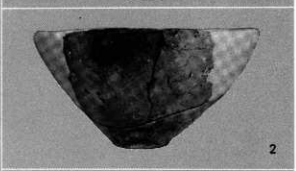


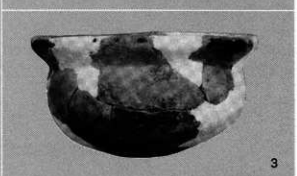
2．左：トレンチ東側遺構検出風景　右：ＳＤ６遺物出土状況

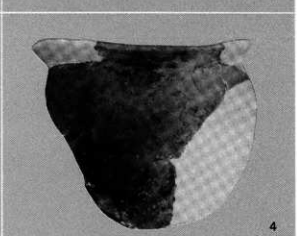




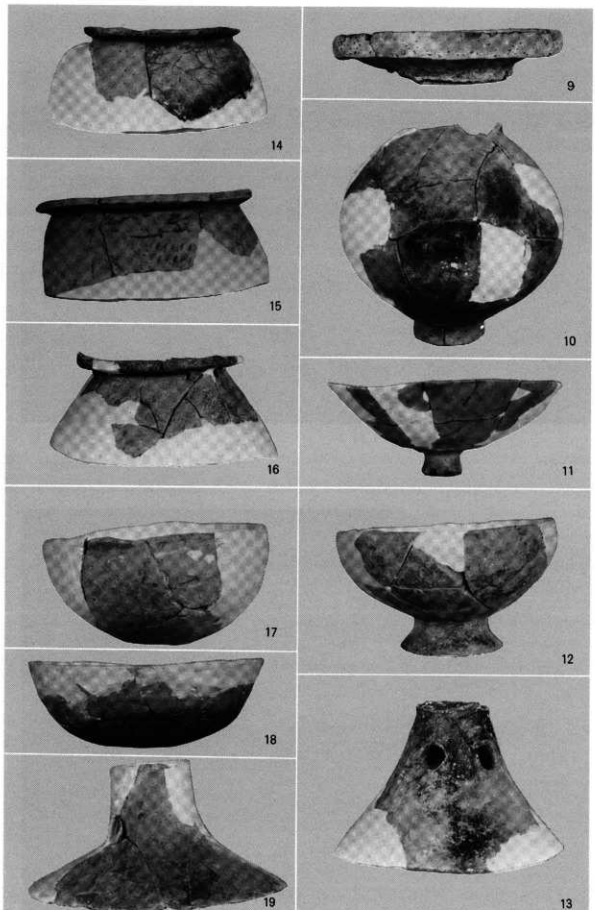






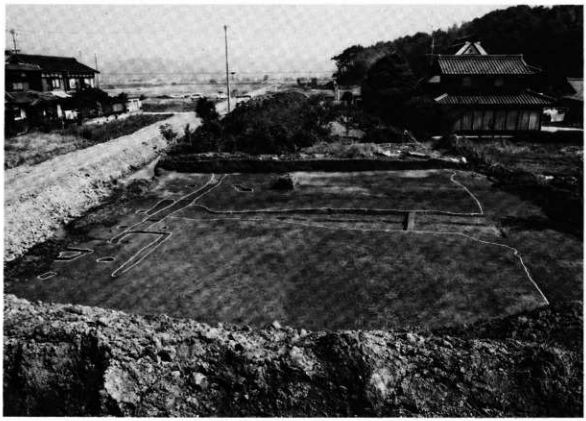


SDO6出土土器

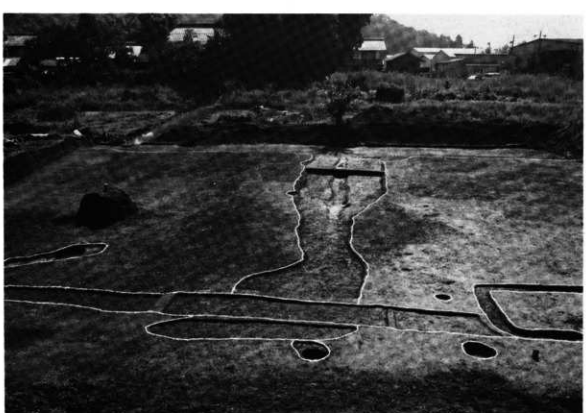


各遺構出土土器

図版十八　寺田遺跡

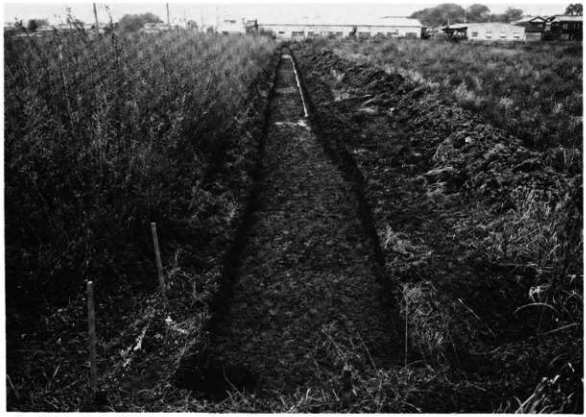


1．第1トレンチ（西から）



2．第1トレンチ（北から）

1．第2トレンチ（北から）



2．第3トレンチ（南から）

1．第4トレンチ（南から）

2．第4トレンチ（北から）

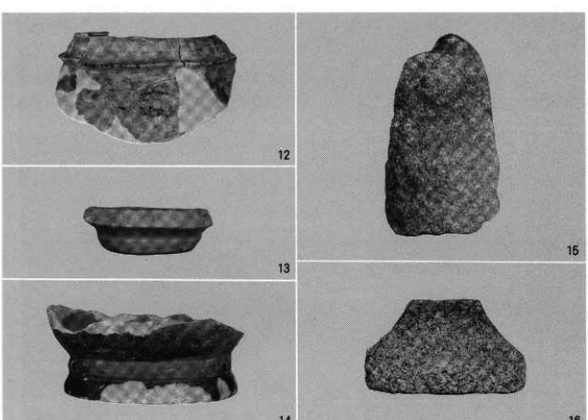
1．第5トレンチ調査前遠景（北西から）

2．第5トレンチ、五輪塔・石仏検出状況

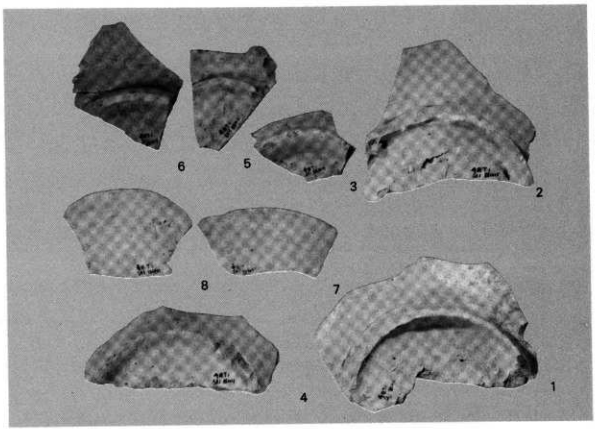
1．第5トレンチ（南西から）

2．第5トレンチ（北東から）

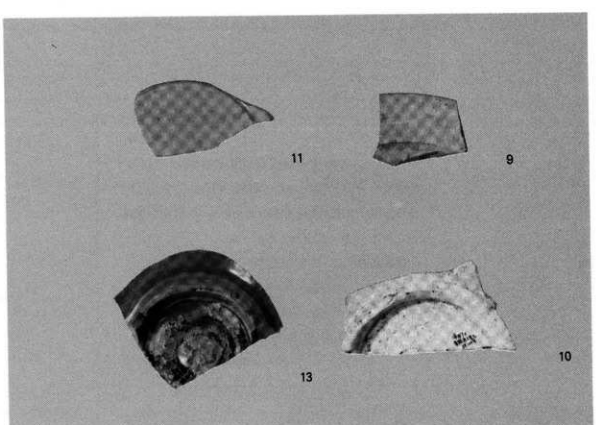
1．第5トレンチ周辺石仏群



2．出土遺物



1．出土遺物



2．出土遺物

平成元年３月
『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書ＸＶI－１』
長沢・西火打遺跡、正恩寺遺跡、国友遺跡、寺田遺跡
編集・発行　滋賀県教育委員会文化部文化財保護課
大津市京町四丁目１－１
電話 0775-24-1121内線2536
㈶滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
電話　0775-48-9781
印 刷 所　上田印刷有限会社